

特15

690

八審院檢事法學士山田喜之助君題辭  
始審裁判所判事瀧川長教君校閱并序文  
法學生後藤本馬君著

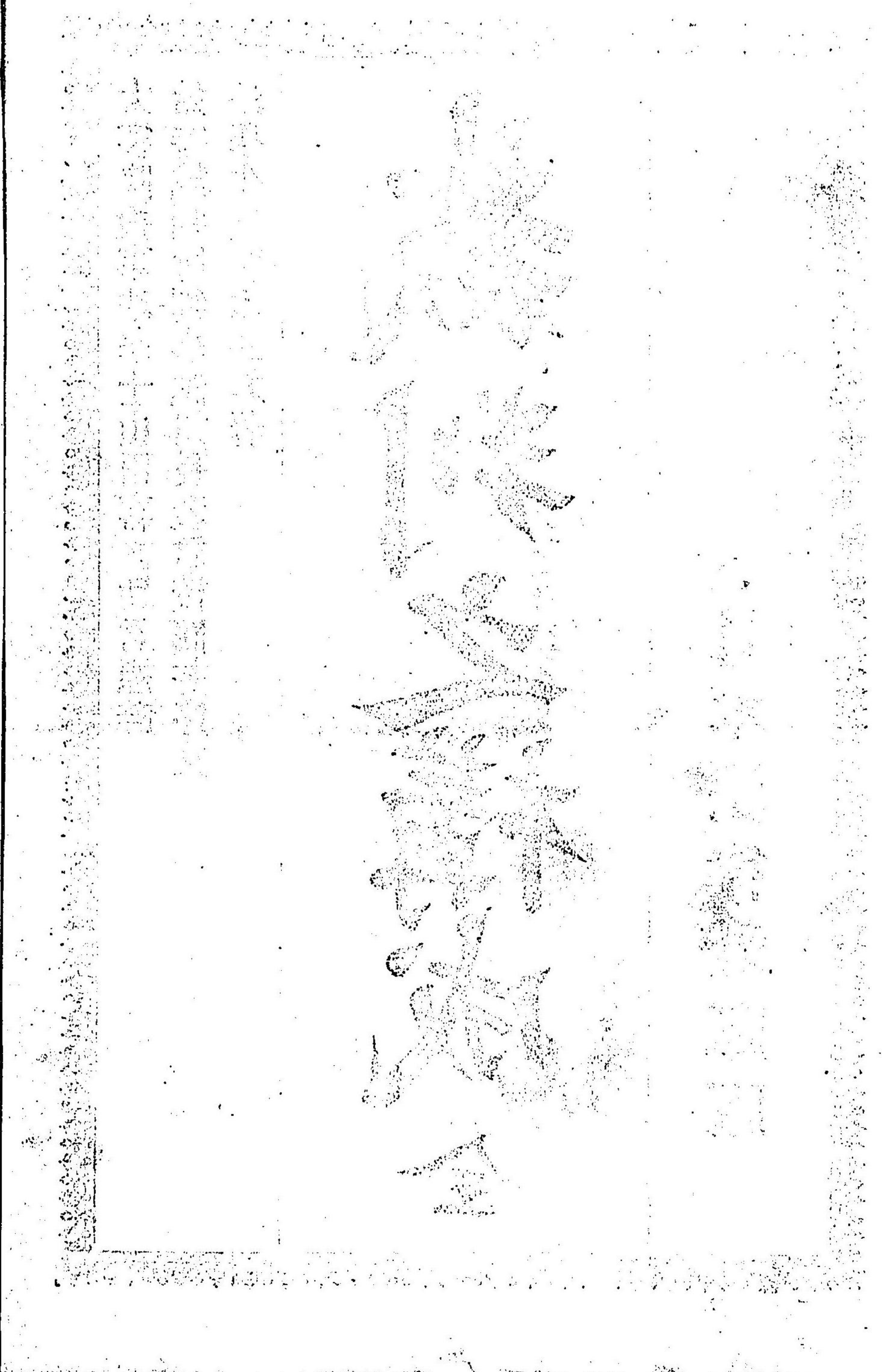
# 裁判之構成全

日本法律社藏版

№ 18990/22

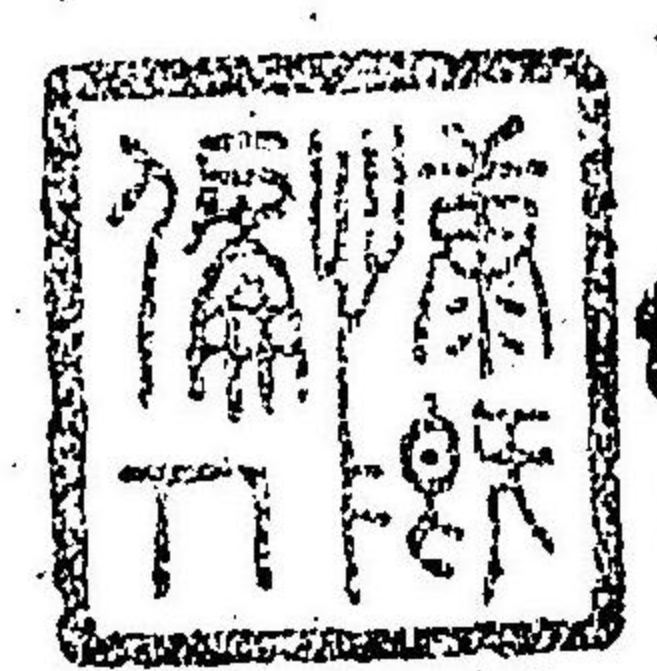
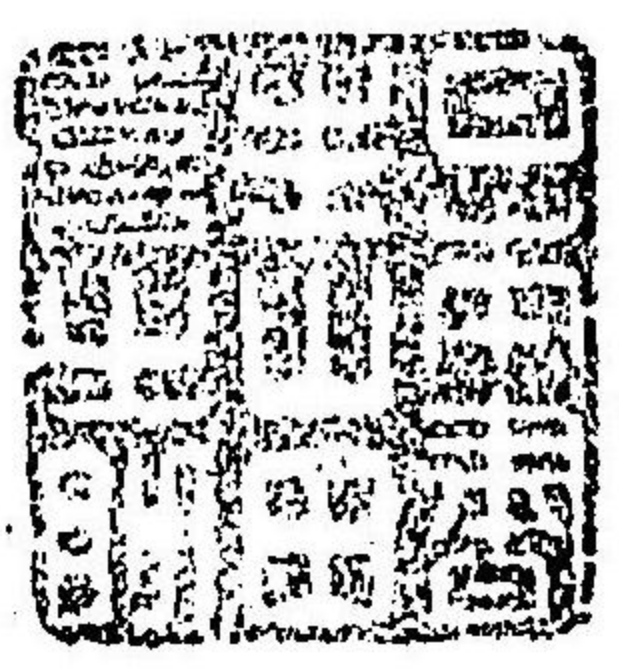


Large, bold, black handwritten characters, likely a signature or name.



寶行

黃南題





## 序

夫レ法律ヲ知ルハ國民ノ義務ナルヲ以テ一國ニ住スル以  
上ハ其國ノ法律ノ大体ヲ知ラサルヘカラス然リ而シテ輒  
近法律學ノ流行ヲ逐ヒ其書ノ梓ニ上ルモノ汗牛充棟モ管  
ナラスト雖モ多クハ高尙ナル理論ニ失シ一トシテ實用ニ  
適スルモノナシ安ソ一般國民ヲシテ法律ノ智識ヲ發暢セ  
シムルヲ得ンヤ余常ニ文章平易ニシテ義理尤モ明確ナ  
ル實用書ヲ得之レヲ以テ一般國民ヲシテ法律ノ大体ヲ知  
ラシメシムルヲ希望スルヤ久矣著者頃々専心吃々本書ヲ編  
述シ余ニ囑スルニ校閲ヲ以テス余之ヲ閱スルニ該書ハ能  
ク治罪法ノ大綱ヲ領取シ裁判ノ構成ヲ明カニス而シテ行

文モ亦平易ナレハ未タ法學ノ何モノタルヲ知ラサル俗人ト雖モ一讀シテ會得スルヲ得ヘシ嗚呼本書ハ余カ平生希望スル所ノ一端ヲ滿タスヲ得タリ誠ニ著者ハ時務ヲ知ルノ士ト謂フヘキ哉聊カ一言ヲ述ヘテ是レカ序トナス

明治二十二年

螻螂野人誌

### 裁判之構成

#### 例言

一本書ハ裁判所構成法ノ發布ニ先テ普ク人民ヲシテ裁判上ニ於ケル審判ノ模様狀況并ニ其構成等ヲ知悉セシメシカ爲メ先ツ刑事上治罪ノ要項ヲ舉示シ法理ヲ以テ詳明ニ解釋シ刑事裁判所ノ組織權力及ヒ出訴ノ方法若クハ被告人代理人裁判官檢察官證人民事原告人等率テ助法上其主要ナル規則手續ヲ網羅セシメテ務メタリ  
一現今我國ノ治罪法ヲ適施スヘキハ重輕罪ニ在リテ違警罪ニ及ハス仍テ主トシテ此二罪ニ就キ必要ナル規則手續ヲ掲ケタリ

明治廿二年

著者識

第一章 刑事訴訟ノ性質及ヒ其區別  
 第二章 刑事裁判所ノ構成及ヒ其權限  
 第三章 告訴告發  
 第一節 告訴告發ノ解  
 第二節 告訴告發ヲ受クヘキ官吏  
 第三節 告訴告發ノ法式  
 第四節 代人ヲ以テスル告訴告發  
 第五節 告訴告發ノ願下又ハ其申立ヲ變更スル  
 第六節 告訴告發ノ効果

### 裁判之構成

#### 目錄

#### 緒論

第一章 刑事訴訟ノ性質及ヒ其區別

第二章 刑事裁判所ノ構成及ヒ其權限

第三章 告訴告發

第一節 告訴告發ノ解

第二節 告訴告發ヲ受クヘキ官吏

第三節 告訴告發ノ法式

第四節 代人ヲ以テスル告訴告發

第五節 告訴告發ノ願下又ハ其申立ヲ變更スル

第六節 告訴告發ノ効果

第四章 現行犯ノ解附現行犯ニ於ケル國民ノ權利

第五章 私訴

第一節 私訴ノ解及ヒ私訴ニ關スル原則

第二節 民事原告人ト爲ルヘキ人

第三節 私訴ノ被告人

第四節 私訴ヲ管轄スル裁判所

第五節 私訴ノ程式

第六節 民事原告人ノ起訴

第七節 私訴ノ願下、棄權、私和

第八節 私訴權ノ消滅

第九節 私訴裁判ニ至ル手續

第十節 私訴ニ對スル上訴ノ手續

第十一節 私訴裁判ノ執行

第六章 誣告罪ノ事

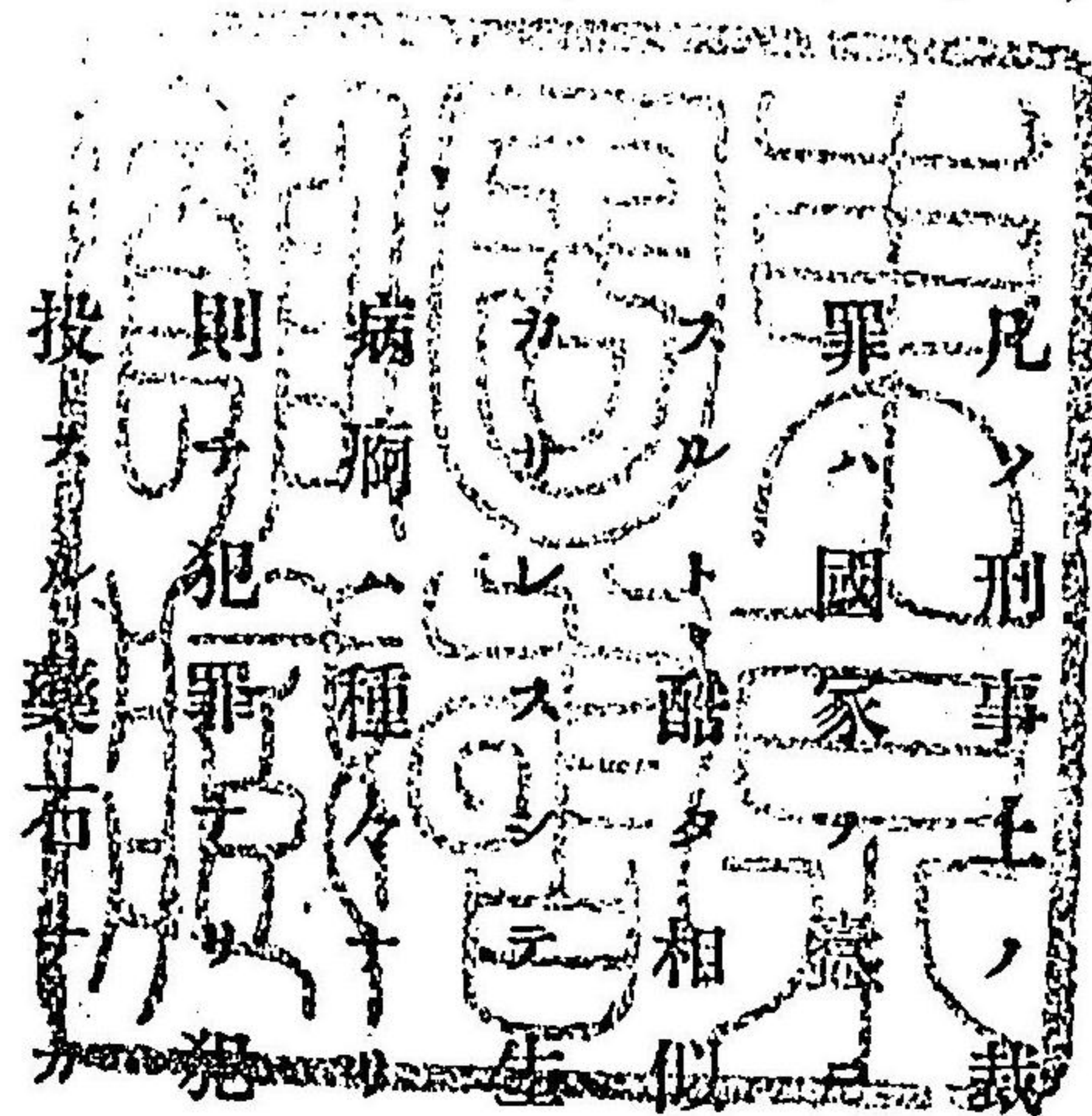
第七章 證人ノ資格及ヒ證人ノ心得

第八章 鑑定及ヒ鑑定人ノ心得

第九章 偽證罪及ヒ偽鑑定罪ノ事

持15  
690

18990/22



# 裁判之構成

緒論

凡ノ刑事上ノ裁判ヲ構成スルモノ犯罪ニアラサルナシ犯罪ハ國家ノ懲罰ニシテ其國家ニ於ケル恰モ吾人人類カ生活タルモノナリ何者吾人ハ少シモ病痾ニ冒存スルヲ能ハサレハナリ而シテ其國家ノト雖正就中最モ害毒ヲ社會ニ流スモノハ則チ犯罪ナリ病痾タル以上ハ隨テ之レニ投テ藥石ニカラルヘカラス之ヲ診フ醫師チカルクカラス是レ自然ノ道理ニシテ古今万国咸チ其備ヘアリ刑法ハ即チ其藥石ニシテ裁判官ハ即チ其醫師ナリ然ルニ今一箇ノ犯罪アルニ方リ其犯人ノ搜索ハ總テ之ヲ當局者ニ一任シ

此處ニ於テ... 國家ノ懲罰ニシテ... 吾人人類カ生活... 病痾ニ冒存スルヲ能ハサレハナリ...



國民タルモノ之ヲ顧ミスシテ可ナルカ犯人既ニ捕ヘラレ  
 タリ之ヲ罰スルト罰セサルト一切裁判官ニ委テ國民タル  
 モノ之ヲ傍觀シテ可ナルカ藥石如何ニ精良ナルモ醫師如  
 何ニ巧妙ナルモ助手看病人ノ助ケアラサレハ人ノ病ヲ治  
 スルヲ能ハサルト同シク法律如何ニ善良ニシテ亦裁判官  
 如何ニ練達ナリト雖モ國民ノ幫助ヲ受ケサレハ以テ犯罪  
 即チ國ノ病痼ヲ治スルヲ能ハサルナリ  
 然ルニ許多ノ國民中ニハ犯罪ヲ視テ寧ロ同情相憐ムモ會  
 テ之ヲ疾マス故ニ又裁判官ヲ助ケテ其罪ヲ正スノ心ナシ  
 却テ手ヲ下シテ犯人ノ刑ニ免ル、ヲ扶ケ或ハ倖ニ手ヲ下  
 スノ甚シキニ至テサルモ心中竊カニ其逃脫ヲ祈ルアリ是  
 レ實ニ國家ノ爲メニ痛嘆スヘキノ限リナリト雖モ固ト犯

罪ノ怖ルヘク又憎ムヘキヲ知ラサル無智賤民ノ社會ニ行  
 ハル、一種ノ感情ニシテ復タ如何トモスルヲ能ハサルナ  
 リ之レニ反シ稍ヤ事理ヲ辨シ犯罪ノ怖ル可ク且ツ憎ム可  
 キヲ知ルヲ以テ無智賤民ノ如ク甚シキニ至ラサルモノト  
 雖モ或ハ誠意以テ裁判官ヲ助クルノ精神ニ乏シキ者アリ  
 此レ等ノ人ハ現ニ犯罪ヲ知ルモ之ヲ告發セズ自ラ害ヲ被  
 ルモ亦等閑ニ付シテ訴ヘス適マ々々之ヲ告ケ之ヲ訴フル  
 ヲチ爲スモ其犯罪ノ證據ヲ集取スルニ至テハ舉テ之ヲ裁  
 判官ニ任セ自ラ進テ其勞ヲ取ラス又或ハ證人トシテ呼出  
 サレ訊問ヲ受クルニ方リ少シモ自己ノ利害ニ關係ナキ事  
 柄ト雖モ押シ包ミテ陳述セサル者アリ此ノ事情ハ余カ一  
 己ノ想像ニ非ラス現ニ裁判官ノ常ニ憂フル所ニ且ツ之

ヲ認メテ害根ト做ス所ナリ  
 夫レ此ノ如ク國民ノ裁判官ヲ助クル精神ニ乏キハ何ソ  
 ヤ其原由ハ蓋シ法律規則ヲ知ラサルト犯罪ハ何故ニ怖ル  
 ヘク又憎ムヘキ乎ノ理ヲ知ラサルト二者ニ基ク者ノ如  
 シ若シ夫レ其理ト法律規則トヲ知ル者多ケレハ犯罪發覺  
 シ易ク其罰行レ易ク隨テ法律ノ威力立チ易シ人々明カニ  
 犯罪ノ害毒ヲ知リ且ツ法ヲ設ケテ之ヲ罰スル所以ヲ解ス  
 レハ犯人ヲ逐フテ罪ニ服セシムルノ念慮深シ其念慮深ケ  
 レハ犯人儆ニシテ刑ヲ免ル者尠ナク犯罪ノ數隨テ減ス  
 ヘシ西哲曾テ曰總テ民間ニ物理ヲ解スル者アルハ其法官  
 ノ助ケヲ爲スニ數千ノ巡查ニ勝レリト嗚呼善哉言ヤ  
 今ヤ國民ヲシテ強テ自ラ此理ヲ解セシメ以テ法官ヲ助ク

ル精神ヲ發揮スル方法ハ果シテ如何ス可キカ其最モ簡易  
 ナル方法ハ刑事ノ訴訟ニ關シ苟モ裁判官ヲ助クルニ足ル  
 ヘキ規則手續及ヒ其心得ト爲ルヘキ事項ヲ平易ニ解釋シ  
 テ之ヲ知ラシメ以テ善良ナル注意ヲ喚ヒ起スニアリト信  
 ス乃チ以下此趣意ヲ以テ記述スル所アラントス

第一章 刑事訴訟ノ性質及其區別

刑事訴訟ノ何モノタルヲ及ヒ其區別ヲ知ルハ甚タ必要ナ  
 ルヲ以テ本章ニ於テ之ヲ略説スヘシ

刑事ノ訴訟ハ之ヲ公訴ト稱シ私訴ト區別ス（私訴ノ解ハ後章ニ詳カナリ）  
 蓋シ公訴ノ目的トスル所ハ甚タ簡單ナリ即チ犯罪ヲ證明  
 シ刑ヲ適用スルニ在リ犯罪ヲ證明スルトハ惡事ノ證據ヲ  
 舉ケテ之ヲ明カニスルヲ云ヒ刑ヲ適用スルトハ其證據立

テラレタル惡事ニ刑法定ムル所ノ罰ヲ當テ行フヲ云フ  
公訴ノ目的ハ如此ト雖モ亦此ノ目的ヲ達スル取調ノ方法  
上ヨリ公訴ヲ左ノ二箇ニ大別セリ

第一豫審

第二公判

豫審トハ傍聽ヲ禁シテ訴訟ヲ取調フル方法ニシテ其目的  
ハ二箇ノ利益ヲ主トス曰ク社會ノ利益曰ク被告人ノ利益  
是レナリ

夫レ苦ヲ避ケテ樂ニ就カントスルハ情慾ノ然ラシムル所  
ナレハ被告人タルモノハ分疏百端惡事ヲ彌縫シテ其責ヲ  
免カレントス故ニ若シ犯罪即チ惡事ノ證據備ハラサルニ  
モ拘ハラズ直ニ之ヲ公ケノ裁判ニ附スルキハ或ハ無罪ノ

言渡ヲ爲サ、ルヲ得サルノ恐レアリト雖モ先ツ豫審ニ於  
テ重モナル證據ヲ蒐集シ而シテ之ヲ裁判ニ附スレハ其恐  
レヲ防クヲ得ヘシ是レ社會ノ利益ニアラスヤ又濫リニ  
嫌疑ノミヲ以テ無罪ノ人ヲ公ケノ裁判ニ附スルキハ縱ヒ  
無罪ノ言渡ヲ受クルモ其人ノ名譽ト財産トニ及ホシタル  
損害ハ少々ナラス然ルニ先ツ之ヲ秘密ノ取調ヲ爲ス豫審  
ニ附スルキハ其憂ナカルヘシ是レ被告人ノ利益ニアラス  
ヤ以上說ク所ヲ茲ニ約說スレハ左ノ如シ  
豫審トハ被告事件ヲ公判ニ移ス可キカ否ヤニ付有罪無罪  
ノ證據ヲ蒐集スルヲ主トスル秘密ノ取調ヲ云フ  
然リ而シテ豫審ヲ行フハ重罪輕罪ニ限リテ違警罪ニ及ハ  
ズ且重罪ニ付テハ必ス豫審ヲ行ヒ輕罪ハ事件ノ難易ニ從

ヒ檢事ノ請求アルモノニ限リテ之ヲ行フモノナリ豫審ノ上ニテ有罪ノ證據充分ナリト認ムルキハ之ヲ管轄裁判所ニ移スノ言渡ヲ爲シ證據不充分ナルキ又ハ其罪ナキキハ免訴ノ言渡ヲ爲ス而シテ其言渡ヲ總稱シテ豫審終結ノ言渡ト云フナリ

公判トハ豫審ノ如ク其取調ヲ密行セズ公然傍聽ヲ許シテ被告事件ヲ審理スル方法ナリ苟モ一旦訴ヘラレタル事件ニ付豫審ニ於テ犯罪ノ證據充分ナリト認メラレ又豫審ハ經サルモ犯罪ノ證據備ハレリト見ユル事件ハ皆テ公判ニ付セラル、者トス而シテ公判ノ目的トスル所ハ其被告人ノ有罪無罪ヲ判決スルコアルナリ故ニ公判トハ重罪輕罪違警罪ニ付其被告人ノ有罪無罪ヲ裁判スルヲ主トスル公

ケノ取調ヲ云フ而シテ公判ニ於テノ言渡ヲ裁判言渡ト稱シ被告人罪アルキハ刑名ヲ宣告シ無罪若クハ證據不充分ナルキハ無罪ナリト言渡シ或ハ例外トシテ免訴ヲ言渡スコアリ

以上解シ所ニ依テ豫審ニ於テハ證據ノ判決ヲ目的トシ公判ニ於テハ有罪無罪ノ裁判ヲ目的トスルコトヲ知ル而シテ此ノ二語ハ之ヲ混合スヘカラス蓋シ證據ノ判決トハ犯罪ノ證據ノ充分ナルヤ將タ不充分ナルヤヲ蒐集査閲シ之ニ向テ判決ヲ下スモノニシテ罪ノ有無ヲ定ムルニ非ス之ニ反シテ有罪無罪ノ裁判トハ敢テ證據ヲ蒐集セズ現ニ存在セル證據ヲ按テ其罪ノ有無ヲ決スルモノナリ此ノ如ク差異アルヲ以テ亦自ラ其効果ヲ異ニス即チ豫審ニ於テ証

十  
據不充分ナリトシテ免許セラル、ト雖モ後ニ犯罪ノ新証  
憑ヲ發見シタルキハ再ヒ審理ニ附セラル、ナリ何トナレ  
ハ以上説明スル如ク豫審ノ判決ハ其證據限り効ヲ生スル  
モノニテ當時未ダ發見セサリシ證據ニ對シテハ毫モ其効  
ヲ及ホサ、レハナリ之ニ反シテ公判ニ於テ無罪ノ言渡ヲ  
受ケ其言渡確定シタル以上ハ縱トヒ後ニ至リテ有罪ノ証  
據ヲ發見スルモ又ハ犯人自ラ罪ヲ告ケ來ルモ再ヒ之ヲ審  
理スルコトナシ何トナレハ其言渡ノ効ハ裁判ニ附セラレタ  
ル事件全体ニ及フモノナレハナリ  
豫審公判ノ外ニ控訴、故障、上告、哀訴、非常上告、再審ノ訴等ノ  
區別アリ是等ノ區別アル所以モ亦一應心得置クヲ要ス依  
テ簡單ニ左ニ示サン

(甲)控訴トハ公判ニ於テ爲シタル裁判言渡ニ對シテ不服ア  
ル場合ニ其裁判ヲ爲シタルヨリ上級ノ裁判所ニ其事件ノ  
覆審即チ調へ直シテ請願スル方法ナリ但檢事ハ如何ナル  
言渡ニ對スルモ控訴スルヲ得ルト雖モ被告人ハ有罪ノ言  
渡ヲ受ケタル時ニアラサレハ控訴スルヲ得ス  
違警罪裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ハ輕罪裁判所ニナシ輕  
罪裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ハ控訴院ニ爲シ控訴院ハ其  
院内ニ設ケタル刑事局ニ於テ之ヲ取調フルモノトス而シ  
テ重罪裁判所ノ裁判ニ對スル不服ハ大審院ニ上告スルヲ  
得ルノミナリ

(乙)故障ハ之ヲ豫審終結ノ言渡ニ對スル故障ト欠席裁判ニ  
對スル故障トノ二種アリ豫審ノ故障ハ其事件ノ覆審ヲ願

フモノニシテ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ會議局ニ於テ之ヲ受理判決ス欠席裁判ノ故障トハ公廷ニ出席セザリシ被告人ニ對スル有罪ノ言渡ニ對シ被告人ヨリ之ヲ不服トシ其言渡ヲ爲シタル裁判所ニ向テ言渡ノ改正ヲ求ムル方法ヲ云フ

(丙)上告トハ重罪ノ裁判及ヒ終審ノ裁判即チ控訴ヲ經タル輕罪ノ裁判又ハ會議局カ豫審ノ故障ニ付下シタル判決ニ對シ尙ホ不服アル場合ニ大審院ニ向テ之ヲ訴ヘ以テ其言渡ノ破毀更正ヲ請願スル方法ヲ云フ然レモ上告スルコハ法律ニ明記シタル理由アルニアラサレハ爲ス能ハス其理由ハ治罪法第四百十條ニ規定セリ  
以上掲ケタル三箇ノ方法ハ通常ノ方法ニシテ之ヲ總稱シ

テ上訴ト云フ以下ニ記スル方法ハ非常ノ方法ニシテ法律カ特ニ規定シタル寬典ナリ

(丁)哀訴トハ上告ニ對スル大審院ノ判決ニ付法律ニ明示シタル瑕瑾アル場合ニ於テ其言渡ノ改正ヲ大審院ニ向テ哀願スル方法ヲ云フ(治罪法第四百三十七條參看)

(戊)非常上告トハ法律ニ於テ罰セサル所爲ニ對シ刑ヲ言渡シ又ハ定リタル刑ヨリ重キ刑ヲ言渡シタル場合ニ於テ其言渡ニ對シ定期内ニ上訴スルモノナクシテ其裁判確定シタル其言渡ノ破棄更正スル方法ヲ云フ(治罪法第四百三十五條參看)

(己)再審ノ訴トハ重罪輕罪ノ刑ノ言渡ニ對シ裁判確定ノ後法律ニ定メタル理由ニ從ヒ被告人ノ利益ノ爲メニ前ノ言渡ノ改正ヲ求ムル方法ヲ云フ(治罪法第四百三十九條以下參看)

右ノ外尙ホ裁判管轄ヲ定ムル訴ト稱スルモノアリ治罪法第四百四十八條以下ニ規定セリ此ノ如ク叙述シ來レハ畧ホ刑事ノ性質其區別名稱ヲ知ルヲ得タルヲ以テ余ハ以下ニ於テ刑事訴訟即チ公訴ハ最初ニ何人カ起スヘキモノナルカノ問題ニ付聊カ解説セシテ刑事ノ訴訟ハ告訴、告發、現行犯、其他ノ原由ニ因リ犯罪アルヲ認知シ又ハ犯罪アリト思料シタル時檢事其証憑及ヒ犯人ヲ搜查シ治罪法第一百七條以下ノ規則ニ從ヒテ之ヲ起シ之ヲ行フヲ得ヘキモノニシテ其他ハ何人ト雖モ之ヲ起スヲ得サルヲ以テ原則トス尤モ例外トシテ豫審判事ハ現行犯ノミニ付公訴ヲ提起シ民事原告人モ亦公訴ヲ提起スルヲ得ルナリ故ニ刑事ノ原告人トハ獨リ檢事ノミヲ指

稱スルモノト知ルヘシ

民事原告人ハ刑事ノ訴訟即チ公訴ヲ起スヲ得ルト言フト雖モ其權利ハ檢事ト同一ナリト言フニ非ス唯之ヲ起スヲ得ルノミニナリ然レモ亦其權利ハ告訴人ト毫モ異ナラスト言フニモアラスソノ詳カナルコトハ後章ニ於テ之ヲ論セン

第二章 刑事裁判所ノ構成及權限

本章ノ題目ハ治罪法第二編ニ掲ケタルモノニシテ該篇ニ規定セル箇條少カラスト雖モ本書ハ盡ク之ヲ解説スルノ必要ナキヲ以テ止タ本書ヲ讀ムノ順序トシテ緊要ナル條々ノミヲ簡單ニ掲クヘシ

凡ソ訴訟ハ民事アリ刑事アリ各其法律及ヒ手續ヲ異ニスルニモ拘ハラズ法律ハ其裁判所ト同一ノ裁判所トス

ニ然ルノミナラス治罪法第三十一條ニ於テ刑事ノ裁判權ハ民事ノ裁判權ト同一ノ裁判所ニ屬スヘキヲ定メタリ之ヲ民刑合一ノ規則ト云フ但合一ヲ以テ混同ト言フト同一ニ視ルヘカラス蓋シ合一トハ一裁判所ノ裁判官ヲシテ期ヲ定メテ民刑ノ訴訟ヲ別々ニ擔當セシムルモノ、義ニテ混同即チ民事裁判官ニシテ刑事ノ裁判ヲ爲シ刑事ノ裁判官ニシテ民事ノ裁判ヲ爲スコトヲ許スモノニハアラサルナリ

然レモ訴訟ニ民刑ノ區別アル以上ハ隨テ裁判所ノ名稱ヲ區別セサルヲ得ス故ニ法律ハ刑事裁判所ヲ左ノ三箇ニ別チタリ

第一 違警罪裁判所

第二 輕罪裁判所

第三 重罪裁判所

斯ノ三箇ニ分チタレモ民刑合一ノ規則ハ之ヲ棄テタルニ非ス左ノ解説ヲ見テ之ヲ知ラシム

違警罪裁判所ハ治安裁判所カ其裁判所トシテ管轄地内ニ於テ犯シタル違警罪ヲ裁判ス而シテ其裁判官ハ一人ロシテ治安裁判所判事其職務ヲ行フ

輕罪裁判所ハ始審裁判所カ其裁判所トシテ管轄地内ニ於テ犯シタル輕罪ヲ裁判シ又重罪輕罪ノ豫審ヲ行ヒ並ニ其管轄地内ノ違警罪裁判所ノ爲シタル初審ノ裁判ニ對スル控訴ヲ裁判ス而シテ其裁判官ハ一人ニシテ始審裁判所判事其職務ヲ行フ



重罪裁判所ハ三月毎ニ又ハ臨時ニ控訴院又ハ始審裁判所ニ於テ之ヲ開キ以テ其管轄地内ニ於テ犯シタル重罪ヲ裁判ス而シテ其裁判官ハ裁判長一名陪席判事二名トス以上説ク如クナルヲ以テ一裁判所ヲ刑事上ヨリ云フキハ違警罪裁判所、輕罪裁判所ト稱シ民事上ヨリ云フキハ治安裁判所、始審裁判所ト稱スルモノト知ルヘシ但重罪裁判所ハ特ニ刑事ノ裁判ヲ爲スルメニ設ケタルモノナリ

違警罪裁判所ノ初審裁判ニ對スル控訴ハ輕罪裁判所ニ於テ受理シ裁判官一人ニテ判決スレバ輕罪裁判所ノ裁判ニ對スル控訴ハ控訴院内ニ設置セル刑事局ニ於テ受理シ裁判官三名以上ニテ裁判ス

右三箇ノ裁判所ノ外尙ホ大審院及ヒ高等法院ト稱スル法

衙アリ

大審院ハ控訴院ト同シク民事上ト刑事上トニ付テ其名稱ヲ異ニセス但其内ニ刑事局ト稱スル一局ヲ置キ以テ左ノ事項ヲ取扱フモノナリ

第一 上告

第二 再審ノ訴

第三 裁判管轄ヲ定ムルノ訴

第四 公安又ハ嫌疑ノ爲メ裁判管轄ヲ移スノ訴

大審院ハ他一切ノ裁判所トハ大ニ其性質ヲ異ニシ稱スルニ法律裁判所ノ名ヲ以テシ事實裁判所ト云フ稱呼ト相對セシムルナリ蓋シ事實裁判所即チ違警罪裁判所、輕罪裁判所重罪裁判所ハ法律ヲ適用スルハ當然ナレバ其主トスル

處ハ事實ヲ取調ヘテ罪ノ有無ヲ決スルコアリ大審院ハ事實ノ争ヒハ之ヲ問ハスシテ單ニ法律上ノ争ヒノミヲ裁定スルヲ主トシ法律ノ統一ヲ掌ルヲ職務トス是レ法律裁判所ト稱スル所以ナリ

高等法院トハ非常特別ノ裁判所コシテ上裁アルコアラサレハ之ヲ開クヲ得サルモノコシテ且其裁判コ對シテハ上訴ヲ許サ、ルヲ以テ原則トス而シテ其裁判官ハ裁判長一人陪席裁判官六名ヲ以テ組織シ以テ左ノ事件ノミヲ裁判ス

(甲)皇室ニ對スル罪

(乙)國事ニ關スル罪(即チ内亂ニ關スル罪外患ニ對スル罪)

(丙)皇族ノ犯シタル重罪及ヒ體刑ニ該シヘキ輕罪

(丁)勅任官ノ犯シタル重罪

治罪法ノ定ムル所ニ從ヘハ是等ノ罪犯ハ高等法院ノ管轄スヘキモノコシテ他ノ裁判所ニ於テハ之ヲ裁判スルノ權利ナキモノトス然ルニ其後政府ハ單行ノ布告ヲ發シ是等ノ犯罪ト雖モ政府ハ高等法院ヲ開カサルハ他ノ裁判所ニ管轄スルヲ得ヘキ旨ヲ定メタリ故ニ通常ノ重罪裁判所ト雖モ之ヲ裁判スルノ權利ヲ得タリ夫レ大阪重罪裁判所ニ於テ審理セシ國事犯一件ノ如キ其一例ナリ

第三章 告訴告發

第一節 告訴告發ノ解

告訴ト云ヒ告發ト云ヒ其名異ナリト雖モ等シク犯罪アルヲ官ニ申立タルノ義ナリ然レモ亦自ラ區別スリ即チ告

訴トハ犯罪ニ因リ害ヲ被リタル者ヨリ之ヲ當該官ニ訴フ  
ルヲ云ヒ告發トハ犯罪アルコトヲ認知シ又ハ犯罪アリト  
ト思料シタルルキ被害者ニ非サル者ヨリ之ヲ當該官ニ告ク  
ルヲ云フ

爰ニ犯罪ト稱スルハ一所行ノ刑法ニ觸ル、ニ由リ其罰ヲ  
蒙ルヘキモノヲ云フ故ニ假令或ル所行ニシテ實ニ憎ムヘ  
クシテ且其所行ニ付損害ヲ受ケタル者アリトモ刑法ニ其  
罰ヲ豫定シアラサル以上ハ告訴又ハ告發ヲ爲スヲ得サル  
ヘシ止テ民事裁判所ニ其ノ救正ヲ願フヨリ他ニ手段ナシ  
何トナレハ刑法第三條ニ法律ニ正條ナキ者ハ何等ノ所爲  
ト雖モ之ヲ罰スルヲ得ストアレハナリ又外形上ニ犯罪  
タル可ク見ユル所行ト雖モ法律上之ヲ罰セサルモノアリ

之ヲ不論罪ト稱ス是レ亦告訴告發スルモ無益ナリ此不論  
罪ハ刑法第四章第一節中ニ定メアルヲ以テ參看スヘシ又  
其所行ハ犯罪ナリト雖モ法律ニ定メタル期限ヲ經過シタ  
ルモノハ檢事之ヲ起訴スルヲ得ス之ヲ公訴ス滿免除ヲ  
得タル犯罪ト云フ是亦告訴又ハ告發スルモ其効ナキハ勿  
論ナリ期滿免除ノ期限ハ違警罪ハ六月輕罪ハ三年重罪ハ  
十年トス

右等ノ心得ナクシテ漫リニ告訴又ハ告發スルルキハ被告人  
トナリシ者ハ遂ニ免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル後ニ反  
ツテ告訴告發者ニ對シテ誣告ノ告訴又ハ損害賠償ノ訴ヲ  
起シ前ノ告訴告發者ハ圖ラズ煩累ヲ蒙ルノ恐レアリ注意  
セサルヘカラス(誣告等ノ事ハ下章ニ詳カナリ)

此ノ如ク解説シ來レハ畧ホ告訴告發ノ何モノタルヲ知  
リ得ヘシト雖モ尙ホ知得スヘキ事項數多アルヲ以テ以下  
區別セテ細説スヘシ

第二節 告訴告發ヲ受クル官吏

告訴告發ヲ爲サント欲スルモ先ツ如何ナル官吏ガ告  
訴告發ヲ受クル者ナルカヲ知ルヲ必要トス其官吏ハ則チ  
左ノ如シ

- (一) 豫審判事
- (二) 檢事
- (三) 司法警察官

豫審判事檢事ハ輕罪裁判所職員ニシテ司法警察官ハ警  
視廳又ハ警察署ノ警部補以上ノ總稱ナリ然ルニ裁判所警

察署ハ全國到ル所トシテアラサルハナシ左スレハ何レノ  
裁判所又ハ警察署ニ告訴告發ヲ爲スモ差支ヘナキカト云  
フニ決シテ然ルニ非ス然ラハ如何スヘキカ是又告訴ト告  
發トノ間ニ相違アルヲ以テ記憶シ置カサル可カラス  
告訴ハ犯罪ノ地若クハ犯人所在ノ地ノ豫審判事檢事又ハ  
司法警察官ニ爲シ告發ハ告發人所在ノ地若クハ犯罪ノ地  
ノ豫審判事檢事又ハ司法警察官ニ爲スヘキ者トス  
告發ハ通例自己ノ利害ニ關係ナキヲ以テ唯其犯罪アル  
ヲ官ニ知ラシムレハ以テ足レリトス故ニ三ツノ官吏中何  
レニ爲スモ前以テ便不便ノ思慮ヲ要セス之ニ反シテ告訴  
ハ自己ノ利害ニ頗ル關係アルヲ以テ之ヲ告訴スルニハ當  
サニ三ツノ官吏中何レニ爲スヘキガ便利ナルカヲ考ヘサ

ルヘカラス  
 之ヲ知ラント欲セハ先ツ豫審判事検事又ハ司法警察官ハ  
 告訴ヲ受クレハ如何ナル手續ヲ爲スカチ知ルチ必要トス  
 抑モ告訴(又ハ告發)ハ只犯罪アルト官ニ申告スルノミナ  
 レハ第三章第六節ニ詳解スル通り之ニ由テ直ニ訴訟即チ  
 公訴ノ起リタルモノニアラス検事ニ於テ其告訴ニ係ル事  
 件ハ犯罪ナリト考ヘ又ハ犯罪トナルヘシト考フルキハ裁  
 判官ニ向テ公判ヲ求メ又ハ豫審ヲ求ムルナリ此時カ則チ  
 公訴ノ起ル時ニシテ起訴ノ權ハ檢事獨リ掌握スルチ以テ  
 普通ノ原則トス左レハ豫審判事告訴(又ハ告發)ヲ受ケタル  
 時ハ一應之ヲ取調ヘ其事件犯罪ナリト思ヒ又ハ尙ホ引續  
 キ取調フヘキモノト老ヘタルキハ其事件ヲ檢事ニ送致シ

テ起訴アルチ待チ司法警察官ハ速カニ其告訴(又ハ告發)ノ  
 書類ヲ檢事ニ送致ス可キモノトス此ノ如ク一度ハ總テ檢  
 事ノ手ニ纏マルモノナルニ付其纏マル間ニ多少ノ時日ヲ  
 費ヤスハ必然ナリ若シ告訴人タルモノ此ノ理ヲ知リテ直  
 ニ檢事ニ告訴スルキハ時日ヲ費カ、ルチ以テ甚タ便益ナ  
 ルヘシ  
 右ノ如ク檢事ハ訴ヲ起スノ權チ有ス故ニ刑事訴訟即チ公  
 訴ノ原告人ハ獨リ檢事ノミニシテ告訴人ハ原告人ニ非ス  
 然ルニ世間之ヲ知ラスシテ民事訴訟ト同様ニ自ラ原告人  
 ト稱スルハ誤テリト云フヘシ  
 時トシテ檢事ハ告訴アリト雖モ起訴セサルコトアルヘシ而  
 シテ告訴人ハ之ヲ不服トスル場合アルヘシ此時告訴人ハ

如何爲ス可キカ治罪法第六十七條第二項ノ規則アルヲ以テ控訴院ノ檢察長ニ向テ告訴スルヲ得、檢察長之ヲ取調フヘキモノト考フルルハ輕罪裁判所ノ檢察長ニ其告達ヲ爲スヘシ此告達ヲ受ケタル檢察長ハ命ニ從ヒ之ヲ起訴セサルヲ得ス若シ又檢察長ニ於テモ告訴ヲ退ケタルハ如何爲スヘキカ此場合ニハ第五章第六節ニ説ク如ク豫審判事ニ告訴ヲ爲シ併セテ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ爲スノ一方法アルノミ而シテ此ノ方法ハ檢察長又ハ檢察長ニ告訴ヲ爲サ、ル以前ト雖モ行フヲ得ヘキモノニシテ告訴人ノ爲メニハ最モ便利ナル規則ナリ

第三節 告訴告發ノ法式

告訴、告發ヲ爲スニ付テノ法式、チシテ徒ラニ煩雜ナラシム

ル時ハ爲メニ告訴告發スルヲ厭ヒ敢テ之ヲ爲サ、ルヲアルヘシ果シテ然ルハ國民ノ權利ハ伸ヒス惡漢益々惡ヲ逞スルニ至ルヘシ左レハ立法者ハ容易ニ告訴告發シ得ルノ道ヲ開ケリ然レモ全ク法式ヲ定メサルハ又弊害ヲ生セシヲ慮リ簡單ナル法式ヲ規定セリ

告訴告發ハ書面ヲ以テ爲ス正則トシ口頭ヲ以テ爲スヲ變則トス但シ兩者中、人ノ撰ム所ニ任セテ敢テ之ヲ制限スルヲナシ

書面ノ告訴、告發ハ告訴告發ヲ爲ス本人自ラ署名捺印シタル者ヲ以テ之ヲ爲サ、ル可カラス蓋シ此法式ハ人々ノ詐僞ヲ防ク爲メ定メタルモノナレハ必ス遵守セサルヲ得ルモノナリ但シ本人署名捺印スルヲ能ハサルハ他人

ナシテ代書セシムルヲ得ルト雖モ本人ノ氏名ハ他人ノ代書ニ係ル事由ヲ其傍ラニ記載ス可シ(治罪法第二十五條參着)

前條ノ法式ハ法律ニ正條ヲ掲ケテ以テ望ム處ノモノナレ  
凡其他尙ホ告訴告發ノ書面ニ具備スヘキ條件アリ請フ之ヲ左ニ辨セシ

第一犯罪ノ性質、方法……犯罪ノ性質トハ詐欺取財トカ故殺トカ總テ其所爲ノ「すじよう」ヲ云ヒ犯罪ノ方法トハ總テ其所爲ノ仕方、手段ヲ云フナリ此ノ條件ハ刑ヲ當行スル第一ノ基礎ナルヲ以テ必ス記載スヘシ且盜罪又ハ詐欺取財等總テ物件ニ關スルモノハ其物件ノ價額、性質ヲモ記載スルヲ可トズ

第二犯罪ノ日時、場所……犯罪ノ日時ハ期滿免除ノ起算方

其他ノ處分上ニ關係アリ犯罪ノ場所ハ裁判管轄ヲ定ム

ルニ關係アルヲ以テ固ヨリ明確ニ記載セサル可カラズ  
第三被告人ノ住所、氏名……ヲ記載スヘキハ勿論ニシテ若

シ之レ無キ時ハ何人ニ對スル告訴告發ナルカ之ヲ知ルニ由ナカルヘシ然レモ必ス其住所氏名ヲ記載ス可シト云フニアラス犯人ノ誰タルヲ確知セサル時ハ其嫌疑ヲ懷ク人ヲ指シ示シ又ハ其容貌、綽名等ヲ記載スルモ差支ナシ

第四證人ノ住所、氏名……證人ハ事件毎ニ必スシモ之レ有ルモノニアラサレハ無キモノヲ強テ記載スルニ及ハサルナリ

第五其他證據及ヒ事實參考ト爲ル可キト……告訴人ハ自己ノ犧牲ト爲リタル事柄ノミチ訴へ告發人ハ自己ノ認知シ又ハ思料シタル事柄ノミチ申告スルヲ以テ未タ充分ナリトセス務メテ其事柄ヲ儘カムヘキ證據及ヒ之ヲ儘カムルコト付參考トスヘキ事柄ヲ記載スルヲ要ス否ラサレハ犯罪捜査上甚タ困難コサリ時トシテハ告訴告發ヲ爲シタル目的ヲ達スルヲ能ハサルコト至ル可シ

告訴公發ノ書面ハ一コ之ヲ告訴狀告發狀ト稱ス而シテ此書面ハ治罪法第二十六條ノ規則コト從テ作ラサル可ラス該條コト曰ク「官吏其他何人コト限ラス訴訟コト關スル書類ノ正本又ハ謄本ヲ作ルコト付文字ヲ改竄ス可カラズ若シ挿入削除及ヒ欄外ノ記入アル時ハ之コト認印ス可シ文字ヲ削除スル

時ハ之ヲ讀得可キ爲メ字體ヲ存シ其數(數トハ削除シタ)ル字數ヲ謂フ(ナ)記載スヘシ此規則ニ背キタルキハ其變更増減ノ効ナカルヘシト

告訴狀告發狀ハ或ハ之ヲ郵便ニ付シ或ハ使者ヲ以テ之ヲ差出スヲ得ルト雖モ差支ナキ時ハ自ラ持參スルヲ以テ尤モ良法トス若シ書面ニ不明瞭ノ廉アルカ全ク説明ナキ時ハ裁判官ハ其辨明ヲ爲サシムル爲メ之ヲ呼出スヲ有ル可シ此ノ場合ニ於テ民事原告人トナリ居ラサル告訴人及ヒ告發人ハ証人トシテ訊問セラレ、ナリ(民事原告人、証人、後章ニ詳也カ)

口頭ノ告訴告發ハ唯タ書面ヲ以テセサルモノコシテ其他ノ手續ハ書面ノ告訴告發ト異ナルヲナシ但書面ナキヲ以



テ告訴告發ヲ受ケタル官吏ハ其陳述ヲ書取ル故其時前項ニ揭ケタル條件ヲ明瞭ニ申立ツ可シ  
告訴人ハ告訴ヲ受ケタル證書ヲ要スルキハ之ヲ其官吏ニ請求スルヲ得ルナリ

第四節 代人ヲ以テスル告訴告發

告訴告發ハ必シモ本人自ラ之ヲ爲スヲ要セス事宜ニ依リ代人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得ルモノトス其代人ニハ必ス委任狀ヲ與フヘシ又委任ヲ受ケタル代人ハ其委任狀ヲ官吏ニ差出シ代人ニ相違ナキヲ證明セサル可カラズ否ラサレハ其告訴告發ハ受理セラレサルヘシ而シテ委任狀ハ告訴狀又ハ告發狀ニ添ヘテ差出スヲ良シトス然ルニ躬自カテ權利ヲ行フ能力無キ者即チ無能力者ノ告

訴<sup>○</sup>（特ニ告發）ハ通常法律ニ定メタル代人即チ法定<sup>○</sup>ノ代人<sup>○</sup>之ヲ爲スモノニシテ此ノ代任ハ無能力者ニ代テ百事ヲ總理

スル任アルモノナレハ委任狀ヲ有セサルモ當然其功アリ無能力者ト稱スル者ハ左ノ如シ

- 一 未丁年者（一ニ幼者ト稱ス）
  - 二 妻タル者
  - 三 白痴、瘋癲人
  - 四 治産ノ禁ヲ受ケタル者
- 法律ニ定メタル代人ト稱スル者ハ左ノ如シ
- 一 未丁年者ノ父若クハ母又ハ親屬、後見人
  - 二 夫タル者
  - 三 白痴、瘋癲人ノ保管人

四 治産ノ禁ヲ受ケタル者ノ財産管理人

第五節 告訴告發ノ願下又ハ其申立ヲ變更スルコト  
 人一タヒ告訴告發ヲ爲シタリト雖モ後ニ至リ其申立セシ  
 事ノ全部若クハ一部ニ間違アルコトニ心付クハ往々コシテ  
 之レ有ルヘシ此ノ如キ場合ニ於テ其告訴告發ノ願下又ハ  
 其間違ノ廉ヲ修正スルコトヲ許サステハ人其過ヲ改ムルヲ  
 妨クル道理ニテ穩カナラサレハ立法者ハ告訴告發人自身  
 ノ利益ノ爲メ又ハ被告人即チ訴ヘラレタル人ノ利益ノ爲  
 メニ之ヲ許スナリ  
 願下トハ事件ノ全部ヲ引取ルコトヲ云ヒ變更トハ全ク願下  
 ケス其儘ニ据ヘ置キテ唯誤リノ廉ノミチ正シ或ハ前ニ申  
 立タル廉ノミチ取消ス等ノ事ヲ云フナリ

願下又ハ變更ハ書面ヲ以テスルモ口述ヲ以テスルモ自由  
 ナリ願下及ヒ變更スルニハ別段ニ其理由ヲ説明スルコト及  
 ハス止マ前ニ爲シタル告訴告發ハ願下ケスルト申立又ハ  
 云々ト申立テタレモ其レハ斯ク々々ト變更スルト言ハハ  
 足レリトス然レモ<sup>○</sup>証告又ハ<sup>○</sup>不正ノ嫌疑ヲ豫防スル爲メニ  
 願下又ハ變更ノ理由ヲ明示シ又ハ其錯誤ナリシコトヲ説明  
 スルハ却テ必要ナルヘシ

但次節ニ於テ詳論スル如ク告訴告發ハ檢事カ犯罪ヲ捜査  
 スルノ基礎トナルノミコシテ之ニ因テ公訴即チ刑事ノ訴  
 訟ノ成リ立タシムルノ効ナキモノナレハ願下又ハ變更ス  
 ルモ決シテ公訴ノ實行ヲ左右スルニ足ラサルナリ然ルニ  
 世間此理ヲ知ラスシテ告訴ノ願下ヲ爲セハ之ト同時ニ刑

事ノ訴訟ハ取消トナリテ罪アルモノモ放免セラレ、ト思  
 惟ナルモノアルハ誤レルモノナリ尤モ極メテ輕微ナル犯  
 罪ニ付警察官ニ爲セシ告訴ハ初メヨリ告訴ナカリシ如ク  
 ニ全ク取消スヲテ請願スルヲ得ルナルヘシ  
 右ノ如ク告訴告發ハ其願下ヲ爲シ又ハ其申立ヲ變更スル  
 ナ得ルト雖モ若シ其告訴告發カ惡意若クハ重キ過失ニ出  
 テタルモノニシテ而シテ其願下又ハ變更ヲ爲スヲテ遲延  
 シタル爲メ被告人ニ損害ヲ蒙ラセタルキハ其責ヲ免ル、  
 一能ハス例ヘハ八兵衛ヲ告訴スルニ當リ不<sup>○</sup>注<sup>○</sup>意ニテ百助  
 ナ八兵衛ナリト誤認シテ告訴シタルニ因リ百助ハ拘留セ  
 ラレタリ然ルニ後ニ其過失ヲ知リテ告訴ヲ願下シルト雖  
 モ爲メニ百助カ受ケタル損害ハ告訴人ニ於テ償ハサル可

カラス又甲者ノ粗<sup>○</sup>忽<sup>○</sup>若クハ惡意ニテ乙者ヲ放火犯人ナリ  
 トシテ告訴告發ヲ爲シ後ニ實ハ乙者ハ失火犯人ナリト變  
 更シタルキハ甲者ハ其變更ヲ爲サ、ル以前ノ責ハ之ヲ免  
 ル、ヲ得ス(第六章ノ末段ヲ參看スヘシ)

第六節 告訴(告發)ノ効果

刑事ノ訴訟ハ檢事之ヲ起シ之ヲ行フモノナルコトハ前既ニ  
 詳述スル所ナリ然ルニ實際上ヨリ觀察スルニ一個人ニ對  
 スル犯罪ハ概ネ告訴(告發)ニ因テ始メテ能ク檢事之ヲ知リ  
 而シテ公訴ヲ行フ方法ヲ得ル者ナリ故ニ告訴告發ヲ爲セ  
 ハ其レノミニテ直ニ刑事ノ訴訟即チ公訴ハ起リタルモノ  
 ト思惟スルモノ鮮シトセス又斯ク思惟スルヨリ隨テ亦告  
 訴、私訴ヲ棄權スル時ハ其告訴等ヲ基礎トシテ檢事カ行ヒ

ツ、アル公訴ハ之ニ因テ消滅スル者ト誤解スルニ至ルナ  
 リ治罪法第三條ニ曰ク公訴ハ被害者ノ告訴ヲ待テ起ル者  
 ニ非ス又告訴私訴ノ棄權ニ因テ消滅スル者ニ非スト然ラ  
 ハ則チ告訴告發ノ効果ハ如何ナル点ニ迄止マル者ナルカ  
 ト問フニ唯犯罪事件アルヲ官ニ知ラシメ以テ犯罪捜査  
 ノ爲メノ基礎トスルニ過キサルノミ  
 斯ク説キ來レハ檢事カ公訴ヲ行フハ告訴アルト否トニ關  
 係ナケレハ檢事ハ犯罪アルヲ知リ又ハ犯罪アリト思料  
 シタル時ハ何時ニテモ起訴ノ手續ヲ爲スモノナルヲハ論  
 チ俟タス然レモ人ノ内行若クハ名譽ニ關シ其事ヲ摘發ス  
 ルニ於テハ却テ害ヲ被害者ニ加フルノミナラス爲メニ一般  
 ノ風俗ヲ敗ルノ恐アルモノアリ又ハ其害ノ有無被害者ニ

非サレハ之ヲ鑒別スルヲ能ハス隨テ其犯罪ノ成立セシヤ  
 否ヲ確知スルヲ得サルモノアリ故ニ此種ノ犯罪ニ付テ  
 ハ法律規則ニ於テ特例ヲ設ケ被害者又ハ親屬ノ告訴ヲ待  
 ツ可キ者ト定メタルニ因リ其告訴アルマテハ檢事之ニ關  
 涉スルノ權ナシ然ルモ此ノ告訴ハ公訴ヲシテ有効タラ  
 シムルニ必要ナル一箇ノ條件トナルヲ以テ通常ノ告訴ト  
 ハ其効果ニ稍差異アルヲ見ルヘキナリ  
 左ニ記載シタル事件ハ被害者ノ告訴アルニアラサレハ公  
 訴モ亦起ラサルモノナリ但第九項以下ノ事件ハ管ニ被害  
 者ノミナラス其親屬モ亦告訴ヲ爲スヲ得

(一)有夫妻ノ罪但本夫先ニ姦通ヲ縱容シタル時ハ告訴ノ

効ナシ(刑法第三百五)

(二) 誹毀ノ罪但死者ヲ誹毀スル罪ニ付テハ其親屬ノ告訴

ヲ要ス(刑法第三百五十八條第三三五)

(三) 他人ノ所有ニ屬スル牛馬以外ノ家畜ヲ殺ス罪(刑法第

十二條)

(四) 公然人ヲ罵詈訕弄スル罪(刑法第四百二十

(五) 他人ノ寫真版權ヲ侵ス罪

(六) 他人ノ商標ヲ冒ス罪

(七) 他人ノ專賣權ヲ侵ス罪

(八) 新聞紙ニ記載シタル事項ノ錯誤ニ付キ正誤ノ請求ニ

應セサル罪

(九) 脅迫ノ罪(刑法第七節參觀第一)

(十) 幼者ヲ畧収誘拐スル罪但幼者式ニ從テ婚姻シタル時

ハ告訴ノ効ナシ又幼者ヲ畧取誘拐シテ外國人ニ交付  
スル罪ハ告訴ヲ要スルノ限ニ在ラス(刑法第七節參觀第一)

(十一) 猥褻、姦淫ノ罪(刑法第三百四十六條乃)

右被害者ノ告訴ヲ要スル事件ト雖モ本人無能力者ナル時  
ハ法律ニ定メタル代人ヨリ告訴ヲ爲スモ其効アリト雖モ  
有夫姦ノ罪ニ付テハ本夫白痴、瘋癲ナル場合ノ外告訴ノ權  
ナシ無能力者、法律ニ定メタル代人○又親屬ノ告訴ハ被害者  
ノ爲メニ之ヲ爲スモノナルヲ以テ被害者ノ意思ニ反スル  
告訴ハ其効ナシ

以上列叙シタル事件ハ告訴ヲ待テ受理ス可キ事件ト云フ  
而シテ斯ク告訴ヲ要スルモノナル以上ハ其告訴ニ基キテ  
既ニ裁判ニ附シ檢事カ公訴ヲ行ヒツ、アル事件ト雖モ告

訴人其ノ願下、棄權、私和ヲ爲セハ公訴ハ之ニ因テ消滅スル  
 カ故ニ被告人ハ其刑ヲ免ル、モノナリ但被告人既ニ裁判  
 ナ受ケタル時ハ仮令願下、棄權、私和スルモ被告人ハ其刑ヲ  
 免ル、トヲ得ス故ニ此ノ告訴ノ棄權私和ハ始審終審ヲ問  
 ハス本案ノ裁判言渡ニ至ルマテハ何時ニテモ之ヲ爲スコ  
 ナ得ルモノト知ルヘシ

第四章 現行犯ノ解附現行犯ニ於ケル國民ノ權利  
 現行犯ハ罪ト爲ル可キ所爲又ハ其犯人ヲ認メ得ヘキ有形  
 上ノ模様アル者ニシテ事實發見ヲ容易ナラシムル爲メノ  
 特例ナリ

治罪法第百條ニ曰ク「現行犯トハ現ニ行ヒ又ハ現ニ行ヒ終  
 リタル際ニ發覺シタル罪ヲ謂フ」ト由是觀之現行犯ハ現ニ

行フ際ニ發覺シタル罪ト現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタ  
 ル罪トノ二者ヲ指スモノニシテ而シテ現ニ行フ際トハ罪  
 トナルヘキ所爲ノ繼續スル時間ヲ謂ヒ現ニ行ヒ終リタル  
 際トハ罪トナルヘキ所爲ヲ止メタル當時又ハ之ヲ止メタ  
 ルヨリ些少ノ時間ヲ經過スルモ其痕跡現存シテ犯罪アリ  
 シ時ノ景狀ヲ認ムルニ容易ナル時間ヲ謂フ○發覺トハ罪  
 ナ犯セシ人ハ何某ナルカ之ヲ知り得スト雖モ豫審判事、檢  
 事、司法警察官ニ於テ之ヲ覺知シテ處分ニ着手シ又ハ常人  
 之ヲ覺知シテ猶豫無ク之ヲ檢證スル様ニ右ノ官吏ニ供ス  
 ルヲ謂フ

例ヘハ豫審判事、檢事、司法警察官又ハ常人ニ於テ現ニ白及  
 ナ揮テ人ヲ殺スヲ睡見シ又ハ現ニ偷盜ヲ行フヲ目撃シタ

ル場合ノ如キハ現ニ行フ際ニ發覺シタル罪ナリ又爰ニ人  
 ナ殺ス者アリテ其者ハ既ニ逃去リシモ屍體其處ニ横ハリ  
 流血淋漓タル場合ヲ豫審判事、檢事、司法警察官又ハ常人ニ  
 於テ瞳見セシ如キハ現ニ行ヒ終リタル際ニ發覺シタル罪  
 ナリ  
 以上ノ説明ニ依レハ現行犯トハ犯罪ノ性質ヨリ生スル區  
 別ニアラスシテ唯其罪カ發覺スルノ遲速ニ基キテ設ケタ  
 ル者ナルヲ知ルヘシ而シテ斯ノ制限ヲ設ケタル目的ハ  
 何レニ在ルカト謂フニ二ツノ必要アルニ因ル何チカ必要  
 ト謂フ曰ク證據ノ湮滅ヲ防クト犯人ノ逃走ヲ防クトニア  
 リ  
 現行犯ハ重罪輕罪違警罪俱ニ之レアリト雖モ重罪輕罪ニ

付テハ亦現行犯ニ準スルモノアリ(治罪法第百一條)其場合ハ左ノ  
 如シ

- (一) 犯人ナリトシテ一人又ハ數人ニ追呼セラル、時……  
 此場合ハ罪犯ノ景狀ニ二ツノ事實ナカル可カラス其  
 一ハ他人ニ追ヒ掛ケラレテ逃ケ行ク者アルヲ其二ハ  
 泥棒トカ人殺トカ或ハ「つかまへてくれ」トカ叫ンテ  
 追ヒ掛ケル人アルヲ是レナリ
- (二) 兇器贓物其他犯人ト思料ス可キ物件ヲ携帯シタル時  
 ……兇器トハ刀劔ノ類贓物トハ盜ミ物等ヲ謂ヒ又犯  
 人ト思料ス可キ物件トハ乞食カ携帯スル金時計ノ類  
 ナリ
- (三) 家宅内ノ犯罪ニシテ戸主又ハ戸主ニ代ル可キ者ヨリ

其檢証又ハ其家宅内ニ在ル被告人逮捕ノ處分ヲ官吏

ニ請求シタル時

前既ニ解説セシ如ク現行犯及准現行犯ノ制ヲ設ケタルノ  
目的ハ證據ノ湮滅ト犯人ノ逃走トヲ防グニ在ルヲ以テ之  
ヲ處分スルニハ總テ其手續ヲ簡易ニシ且急遽ニ出テサレ  
ハ到底其目的ヲ達スル能ハサルヘシサレハ之ヲ處分スル  
ニハ通常ノ規則ニ拘ハラズ大ニ豫審判事檢察司法官警察  
官ノ權限ヲ擴張セリ(治罪法第百二條以下及第  
二百一條以下ヲ參觀ス可シ)且當ニ此官  
吏ノ權限ヲ擴張スルノミナラス一般人民ニマテ大ナル權  
利ヲ與ヘタリ普通ノ規則ニ從ヘハ巡查ト雖モ令狀(令狀ト  
ハ拘引  
狀拘留狀收監狀)ヲ有セサレハ人ヲ逮捕スルヲ能ハサル者  
ナレハ況シテ一般人民ニシテ人ヲ逮捕スルヲ得サルハ

勿論ナリ然ルニ若シ一般人民ニシテ重罪輕罪(特ニ違警  
罪ヲ除ク)ノ  
現行犯(準現行犯ハ)ヲ撞見シタル場合ニ於テハ被害者タル  
者ハ固ヨリ何人ニ限ラス直ニ其犯人ヲ逮捕スルノ權利ヲ  
有スルモノトス

若シ前項ノ場合ニ於テ犯人ヲ逮捕シタル時ハ之ヲ警察署  
ニ引致スヘシ但引致スルヲ得サル時ハ自己ノ氏名職業  
住所及ヒ犯人ヲ取押ヘタル事由ヲ陳述シテ假ニ其犯人ヲ  
巡查ニ引渡シ且ツ速ニ告訴又ハ告發ヲ爲ス可キ者トス犯  
人ヲ巡查ニ引渡シタル時犯人又ハ巡查ヨリ共ニ警察署ニ  
至ルヲ求メラレタルニ於テハ取押ヘテ爲シタルモノハ  
正當ノ事由アルニ非サレハ其求メヲ拒ムヲ得サルナリ

第五章 私訴



第一節 私訴ノ解及ヒ私訴ニ關スル原則

犯罪アレハ隨テ之ニ刑罰ヲ加フルハ一般普通ノ原則ナレ  
 此刑罰ハ固ト公ケノ安寧ヲ壞リタルノ應報ニ過キサレ  
 ハ未ダ以テ公ケノ安寧ヲ壞リタルト同時ニ害シタル各人  
 ノ私益ヲ償フニ足ラス是ヲ以テ刑法第四十六條ニ「犯人刑  
 ニ處セ<sup>中</sup>略」ラルト雖モ被害者ノ請求ニ對シ贓物ノ返還損  
 害ノ賠償ヲ免カルト得ス」ト定メ又治罪法ニ於テ贓物  
 ノ返還損害ノ賠償ヲ求ムル規則手續ヲ定メタル所以ナリ  
 贓物ノ返還トハ被害者カ横奪セラレタル物件ヲ返戻セシ  
 ムルヲ謂ヒ損害ノ賠償トハ損失ノ財産ニ係ルト身體ニ  
 係ルト名譽ニ係ルトヲ論セス總テ金錢ヲ以テ其損失ヲ償  
 ハシムルヲ云フ

而シテ此二ツノ者ハ並ヒ生スルヲアリ或ハ其一ノミ生ス  
 ルヲアリ  
 横奪セラレタル所ノ物件ノ取戻ヲ求ムルヲ目的トスル  
 ナ贓物返還ノ請求ト云ヒ受クル所ノ損害ノ償ヲ求ムル  
 ナ目的トスルヲ損害賠償ノ請求ト云フ而シテ此二箇ノ請  
 求ヲ併セ稱シテ私訴ト云ヒ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ爲ス人  
 ナ稱シテ民事原告人ト謂フナリ  
 蓋シ刑事ノ被告人ナラサル場合ト雖モ甲者ヨリ乙者ニ對  
 シテ物品ノ取戻ヲ求メ若クハ損害ノ償ヲ求メント欲シテ  
 民事裁判所ニ詞訟ヲ起スヲアルハ人ノ能ク知ル處ナレ  
 是等ハ通常民事ノ事件ニシテ私訴トハ稱セス眞ニ私訴ト  
 稱スルハ犯罪ニ原因シタル物品ノ取戻又ハ損害ノ償ヲ求

メント刑事裁判所若クハ民事裁判所ニ向テ爲シタル訴訟ヲ稱スルモノト知ルヘシ然リト雖モ其性質ハ民事ノ訴訟タルヲ免レサルヲ以テ民事上ノ原則ヲ適用ス治罪法第二條ニ「私訴ハ犯罪ニ因リ生シタル損害ノ賠償贓物ノ返還ヲ目的トスル者ニシテ民法ニ從ヒ被害者ニ屬ス」トアルハ以上叙述スル所ヲ約説シタルナリ

贓物犯人ノ手ニ在ル時ハ刑事裁判所ヨリ直チニ被害者ニ還付スルト雖モ若シ輾轉シテ他人ノ手ニ在ル時ハ被害者ノ請求アルニアラサレハ還給セシメス然ラハ則チ若シ贓物カ他人ノ手ニ在ル時ハ如何ナル場合ニ於テモ之ヲ取戻シ得ルト雖モ亦大ニ區別ノ存スルモノアリ左ニ之ヲ論セ

第一 物品ヲ占有スル他人之ヲ公商ニ由テ買取シタル場合

第二 物品ヲ占有スル他人之ヲ公商ニ由ラスシテ買取シタル場合

第一ノ場合ニ於テハ被害者若クハ公商ヨリ買取者即チ物品ヲ占有スル者ニ初メ買ヒ取リシ時ニ拂ヒタル代價ヲ償ハサレハ其物品ヲ取戻スヲ得ス故ニ被害者ハ自ラ代價ヲ拂ヒ又ハ公商ヲシテ拂ハシメ以テ物品ヲ取戻スヘキモノトス而シテ被害者自ラ代價ヲ償ヒタル時ハ其償ヒタル丈ケノ金額ハ犯人ニ對シテ求メ得ルハ勿論公商ニ對シテ請求スルヲモ得ルナルヘシ

第二ノ場合ニ於テハ被害者ハ物品ヲ占有スル者ニ其人カ

初メ買取リシ時ニ拂ヒタル代價ヲ償ハスシテ直ニ之ヲ取  
 戻スヲ得而シテ物品ヲ占有スル者ハ之ヲ拒ムノ權ナシ  
 但其人ハ最初ノ賣主ニ對シテ前ニ拂ヒシ代價ヲ求ムルヲ  
 得ルナリ  
 公商トハ公ケノ商賣人ト謂フ意味ニシテ公商ニ由リ買取  
 シタル場合トハ例ヘハ陶器商ヨリ陶器ヲ買ヒ古着屋ヨリ  
 古着ヲ買ヒタルノ類ニシテ其商賣筋ノ者ヨリ商賣物ヲ買  
 ヒタルヲ云フ公商ニ由ラスシテ買取シタル場合トハ其反  
 對ニシテ例ヘハ商賣人ニ非サル人(即チ常人)ヨリ物品ヲ買  
 ヒ又ハ陶器商ヨリ古着ヲ買ヒタルノ類ヲ云フ尙ホ一層解  
 シ易キ例ヲ舉クレハ甲者、乙者ノ衣類ヲ盜ミテ之ヲ古着商  
 ニ賣却シ其品、古着商ノ手ニ在ル時ハ乙者ハ古着商ヨリ原

價ヲ償ハスシテ取戻スヲ得何トナレハ古着商ハ公商ア  
 ラサル甲者ヨリ買取リタルモノナレハナリ(甲者ハ假令古  
 罪ヲ犯シタル者ナレハ公)之ニ反シテ古着商ハ衣類ヲ丙者  
 ニ賣渡シ丙者之ヲ占有スル時ハ乙者即チ所有者ハ丙者ニ  
 原價ヲ償ハサレハ之ヲ取戻スヲ得何トナレハ丙者ハ公  
 商ナル古着屋ヨリ買取リタルモノナレハナリ尤モ丙者若  
 シ其衣類ハ贓物タルヲ知リツ、買取リシ時或ハ古着屋  
 カ贓物故買ノ罪アル時ハ所有者タル乙者ハ丙者ニ原價ヲ  
 償ハスシテ取戻シ得ル權利アリ  
 以上ハ物品ヲ買取リテ占有スル者ニ對スル場合ヲ論セシ  
 モノナルカ又其外ニ贓物ヲ貰ヒ受ケ或ハ預リ或ハ借リ或  
 ハ質ニ取りタル者アルヘシ是等ノ人々ニ對シテハ如何ナ

ル場合ト雖モ物品ノ所有者ハ金圓ヲ償ハスシテ直ニ取戻  
 ストテ得ルナリ而シテ貰ヒ主、借主、預主、質取主ハ所有者ノ  
 請求ヲ拒ムノ權利ナシ但質取主ハ質置人ニ對シテ償ヲ求  
 ムルヲ得ルナリ讀者ハ右如何ナル場合ト雖モ「トアル文  
 字ニ注意スヘシ買取者ニ對スルノ場合ニハ公商ニ由ルト  
 否トノ關係アリト雖モ質取主等ニ對スル場合ニハ其關係  
 ナシ故ニ質取主等ハ仮令公商ヨリ物品ヲ受取りタル時ト  
 雖モ物品現在スルニ於テハ所有者ハ金圓ヲ償ハスシテ取  
 戻ストテ得ルト知ルヘシ  
 又贓物ヲ占有スル者之ヲ買取リタルニ非スシテ物品ト物  
 品ト交換シテ得タルモノナルキハ公商ニ由ルト否トノ區  
 別ニ從ヒ所有者ノ權利ニ相違アルモノニシテ其規則ハ買

取者ニ對スル場合ト同一ナリ  
 損害賠償ニ付テハ如何ナル場合ト雖モ被害者ノ請求アル  
 ニ非レハ裁判官之ニ干涉スルヲナシ而シテ損害ハ概テ左  
 ノ場合ニ於テ生スル者ナリ

第一贓物ノ既ニ滅盡シタル時例へハ犯人食物ヲ喫シ盡  
 シタルカ若クハ物品ヲ打毀シタルノ類ニシテ贓物ノ  
 無シナリシ類

第二贓物ノ識別ス可カラサル時例へハ犯人カ米、酒等ヲ  
 盜ミ來リテ自己ノ米、酒ト混合シ或ハ之ヲ買取リタル  
 者カ自己ノ米、酒ニ混合シタルノ類ニシテ何レカ贓物  
 ナルカ分ラサルカ如キヲ云フ

第三贓物ノ所在知レサル時

第四名譽若クハ殺傷ニ關シ損害ヲ受ケ又ハ其他犯罪ノ爲メ損害ヲ受ケタル時

第一ヨリ第三マテノ場合ハ贓物ヲ取戻ス能ハサルニ依リ其代リニ損害ヲ要求スルモノナルヲ以テ取戻ス能ハサル物品カ贓物ナル以上ハ當然損害ノ賠償ヲ要求スルヲ得ルト雖モ第四ノ場合ハ之ニ異ナリ訴權ノ生スルニハ左ノ條件アルヲ肝要トス但失火ヨリ生シタル損害ハ我カ法律ニ於テハ之ヲ請求スルヲ許サ、ルノ規則ナリ  
第一 損害ハ犯罪ヨリ生シタルヲ要ス  
人アリ我ニ對シテ如何ニモ重大ナル損害ヲ與ヘタリト雖モ其損害ヲ與ヘタル所爲カ犯罪即チ刑法ニ觸レサル時ハ被害者ニ對シテ私訴權ヲ有セス唯民事裁判所ニ訴フルヲ

チ得ルノミナリ例ヘハ檢事眞ノ犯罪人ナラサル甲ニ對シテ訴ヲ起シタリシモ甲、固ヨリ罪ナキヲ以テ放免セラレタリ其後眞ノ犯罪人ナル乙、捕ヘラレタリ時ニ甲ハ民事原告人ト爲リテ乙ニ損害ノ賠償ヲ要求シテ曰ク「我先ニ故ナク獄ニ下リ莫大ノ損害ヲ受ケシカ是レ必竟スルニ汝カ犯罪アリシニ因ルモノナレハ汝ハ損害ヲ償フノ責アリ」ト然レ此ノ申立ハ正當ノ理由ニ基クモノニ非ス何トナレハ甲カ受ケタル損害ハ檢事カ眞ノ犯人ニ非サル者ニ對シテ爲シタル輕忽ノ訴ヨリ生セシモノニシテ乙ノ犯罪ヨリ生シタルモノニアラサレハナリ  
第二 損害ハ犯罪ノ直接ノ結果タルヲ要ス  
損害ハ一ノ所爲ヨリ生スル結果ナリト雖モ其結果ハ近因

アリ遠因アリ而シテ法律ハ常ニ其近因ノ結果ヲ認メテ遠因ノ結果ヲ採ラス然レモ其結果即チ損害ハ實ニ極マリナキ者ナリ之ヲ例セハ爰ニ人アリ或ハ器械ヲ用テ他ヲ毆打シテ重創ヲ爲シタル被害者ハ醫師ヲ招キテ治療ヲ乞ヒ藥價ヲ拂ヒ且彼是莫大ノ金錢ヲ費シタルモ治療其効ヲ奏セズ不具トナリダリ不具ト爲リタルカ爲メ職業ヲ廢シ當然得ヘキ金錢ヲ得ル能ハス金錢ヲ得ル能ハサルヲ以テ衣食ニ窮スルハ勿論其子ヲ就學セシムルヲ得サルニ至リ其子教育ヲ受ケサリシニ因リ惡童子トナリテ盜賊ヲ働キタル等ノ類ニシテ此等ノ際限ナキ損害ヲ悉ク犯罪者ニ負擔セシムルハ到底爲シ能ハサルナリ故ニ法律ハ犯罪者ヲシテ其所爲ヨリ直接ニ生シタル者ノ責ニ當ラシム右ノ例ヲ以

テ謂ヘハ被害者カ廢業シタル爲メ當然得ヘキ金錢ヲ得サリシトマテハ直接ノ損害ト認ムルヲ得ヘシト雖モ其後ニ係ルモノハ所謂遠因ノ損害ナリ但其損害ハ犯罪ニ直接ナルヤ否ヤハ其事件毎ニ異ナルモノナレハ茲ニ精密ニ論定スルヲ得スト雖モ亦其原則ナキニ非ス即チ直接ノ損害トハ普通ノ智識ニテ豫想シ得ヘキ者ヲ云ヒ之ヲ想像シ得ヘカラサル者ハ間接ノ損害ナリト云フ格言是ナリ

第三 損害ハ現ニ生シタル者ナルトチ要ス  
請求スルヲ得ヘキ損害ハ過去即チ己ニ生シタルモノ、ミ  
ニシテ將來即チ將ニ生セントスル損害ハ之ヲ請求スルヲ  
得ス然レモ必然生スヘクシテ且明確ナルモノハ請求スル  
ヲ得ルナルヘシ

第二節 民事原告人ト爲ル可キ人

何人カ民事原告人タル可キノ能力ヲ有スル乎治罪法第二條ニ私訴ハ被害者ニ屬ストアリ故ニ犯罪ヨリ生シタル損害(茲ニ損害ト云フハ廣キ意味ニテ物品ヲ奪ハ)ニ感觸シタル者ハ民事原告人トシテ私訴ヲ爲スノ權アリト雖モ間接ニ損害ニ感觸セシ人若クハ利益ノ關係ヲキ人ハ其權ナシ人犯罪ニ因テ死去シタル時例ヘハ殺害セラレ或ハ殴打創傷ニ因テ死去シタル時ノ如キハ其相續人犯人ニ對シテ損害賠償ノ訴ヲ起スヲ得何トナレハ本人ノ死去ハ其相續人ナシテ往々活路ヲ失ハシムルモノニシテ其相續人コソ即チ直接ニ犯罪ノ爲メニ損害ヲ被ムリタル者ト謂フヘケレハナリ○又假令ヒ相續人ニ非ストモ苟モ死者ノ親屬ニ

シテ法律上若クハ實際死者ノ扶助ヲ仰テ以テ生活シ居タリシ者モ民事原告人タルヲ得ヘシ  
右ニ反シテ被害者本人犯罪アリタル後他ノ原因ニテ死去セシ時ハ其相續人私訴ノ權ヲ有スル場合ト否ラサル場合トアリ  
被害者既ニ私訴ヲ起シタル後ニ死去シタル場合ニ在テハ如何ナル時ヲ論セス其相續人死者ニ代テ私訴權ヲ有スルヲ得相續人其損害ニ毫モ利害ノ關係ナクモ妨ケナシ何トナレハ相續人ハ他ノ財産ト共ニ私訴權ヲ相續シタルモノナレハナリ  
若シ被害者本人私訴ヲ起サスシテ死去シタル場合ニ於テ其損害財産ノ上ニ在ル時ハ相續人新クニ私訴ヲ起スノ權

アリ例へハ盜罪若クハ詐欺取財ノ罪ヲ犯シタル者ニ對シ  
 贓物ノ返還又ハ損害ノ賠償ヲ求ムルヲ得ルカ如シ犯人ノ  
 罪死者ノ身体ニ對スル者ナル時モ亦之ニ同シ  
 然レモ其損害死者ノ一身ニ止マリテ其財産ニ及ハサルモ  
 ハ隨テ亦相續人ニモ及ハサルナリ是レ犯人ノ罪誹毀ノ罪  
 有夫姦ノ罪等總テ特ニ被害者ノ名譽ノミヲ毀損シタル場  
 合ニ於テ其實例アリ蓋シ是等ノ場合ニ在テハ死者本人獨  
 リ損害ヲ被ムリシヲ證明シ得ルモ他人之ヲ證明スル能  
 ハス仮リニ多少損害アリシヲ知リ得ルト雖モ損害ヲ賠  
 償スルニハ金錢ヲ以テスル者ナレハ其額ヲ定ムルヲ能ハ  
 ス故ニ此ノ如キ場合ニハ相續人私訴ノ權ナシ(被害者出訴  
 死去シタル時)但死者一身ニ對シ行ハレタル犯罪ノ結果ニ  
 ハ此限ニ非ス

シテ若シ相續人ノ名譽上ニ損害ヲ及ホシタルニ於テハ相  
 續人私訴ヲ行フヲ得ルナリ例へハ甲者ノ身代ハ盜ミ物ヨ  
 リ成立セリト誹毀シタル時ハ甲者ハ死去スルモ其身代ヲ  
 相續スル乙者ノ名譽ヲ毀損スルヲ以テ乙者ハ私訴ヲ起ス  
 權利ヲ得ルノ類ナリ  
 私訴ハ民事原告人自ラ爲サ、ルモ妨ケナシ若シ差支アル  
 モ代理人ニ委任シテ之ヲ爲スヲ得○又被害者無能力ナ  
 ル時ハ法律ニ定メタル代理人之ヲ爲ス可シ(第三章第四節)而  
 シテ代人ニ關スル規則ハ告訴ノ場合ト同一ナリトス

第三節 私訴ノ被告人

私訴ノ被告人ト爲ルモノハ被害者ニ對シ贓物ヲ返還シ若  
 シハ損害ヲ賠償スル義務アル者ナリ今其義務アルモノヲ



舉シレハ大畧左ノ如シ

(一) 犯人即チ刑事ノ被告人(贓物ノ返還損害ノ賠償ハ犯人要死ヲ求スル得)

(二) 贓物ヲ買取リテ之ヲ占有スル人

(三) 贓物ヲ受ケ又ハ典物トシテ受取リ之ヲ占有スル人

(四) 交換シテ贓物ヲ受取リ之ヲ占有スル人

是等ノ人ニ對セル民事原告人ノ權利ノ廣狹區域ハ己ニ第一節ニ論シタルヲ以テ茲ニ贅セス

以上四者ノ外ニ毫モ犯罪事件ニ關係ヲ有セスト雖モ他人ノ犯セシ罪ニ因リ生シタル損害ヲ賠償スル責ヲ免カレサル人アリ之ヲ民事擔當人ト謂フ民事原告人私訴ヲ爲スニ方リ犯人ニ於テ損害ヲ賠償スル資力ナシト認ムル時ハ民

民事擔當人ヲ相手取リテ其責ニ當ラシムルヲ得ヘシ

(一) 未丁年(即チ二十歳未滿ノ幼者)者ノ父若クハ母又ハ同居ノ親屬ニシテ監督ヲ爲ス者

(二) 夫タル者

(三) 白痴瘋癲人ノ保管人

(四) 雇主

幼者ノ犯セシ罪ニ因リ損害ヲ被ムリタル人ハ其父、父ノ既ニ死去セシ時ハ其母、父母共ニ亡キ時ハ其幼者ヲ監督スル同居ノ親屬ヲ相手取リ人ノ妻タル者ノ犯セシ罪ニ因リ損害ヲ被ムリタル人ハ其夫ヲ相手取リ白痴瘋癲人ノ犯セタル罪ニ因リ損害ヲ被ムリタル人ハ其保管人ヲ相手取リ雇

人ノ犯セシ罪ニ因リ損害ヲ被ムリシ人ハ其雇主ヲ相手取  
リテ賠償ヲ得ルノ權アリ但シ雇人ノ犯セシ罪ニ付其雇主  
ヲ相手取ルニハ雇人カ雇主ヨリ命セラレタル事件ヲ雇主  
ノ爲メニ行フ間ニ其事件ヨリ損害ノ生シタル時ニ限ル例  
ヘハ馬車ノ御者カ主人ヲ乗セ又ハ主人ノ營業ノ爲メ馬車  
ヲ驅ル際ニ人ヲ挽キ倒シタルニ於テハ其主人ニ對シテ損  
害ヲ請求スルヲ得ルト雖モ其他ノ場合ハ主人責ニ任セス

第四節 私訴ヲ管轄スル裁判所

私訴ハ刑事裁判所又ハ民事裁判所ニ於テ管轄スルナリ故  
ニ私訴ハ何レノ裁判所ニ爲スモ民事原告人ノ撰ム所ニ任  
カス然レモ刑事裁判所ニ向ツテハ公訴ニ附帶スルニ非ラ  
サレハ之ヲ爲スヲ得サルモノトス公訴ニ附帶スルトハ

公訴即チ刑事訴訟ノ審判未タ終ラサル間ニ其訴訟ト共ニ  
審判ヲ請願スルノ意ナリ故ニ私訴ヲ別ニ民事裁判所ニ爲  
シタル時ハ格別ナレモ刑事裁判所ニ爲シタル時ハ常ニ刑  
事(若シハ公訴)附帶ノ私訴ト稱ス

刑事裁判所ニ爲ス私訴ハ公訴ニ附帶セサルヲ得サルカ故  
ニ若シ公訴ノ審判已ニ終リタル後ハ民事裁判所ニ非サレ  
ハ之ヲ爲スヲ得ス

通常民事ノ訴訟ハ請求スル金高、目的物ノ價額ニ從テ裁判  
所ノ管轄ヲ異ニス即チ金高、價額百圓以上ナレハ始審裁判  
所ニ訴ヘ百圓以下ナレハ治安裁判所ニ訴フヘキモノトス  
夫レ私訴ハ其原由犯罪ニ在リト雖モ其性質ヲ問ヘハ均シ  
ク民事訴訟ナリ故ニ私訴ヲ民事裁判所ニ爲ス時ハ通常民

事ノ訴訟ノ如ク金高價額ニ從テ管轄ヲ定ムヘキハ當然ナ  
 レモ公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ爲ス時ハ其金額價額ノ  
 多寡ハ敢テ問フ處ニ非ス左レハ金高ハ壹錢若クハ貳錢ノ  
 少額ト雖モ刑事裁判所ハ之ヲ受理スルナリ  
 人アリ甲者ニ對シ告訴ノミチ爲シ私訴ヲ爲ストテ考ヘ中  
 又ハ公訴ニ附帶シテ私訴ヲ刑事裁判所ニ爲シ又ハ私訴ノ  
 ミ別ニ民事裁判所ニ爲シタル場合ニ於テ甲者ハ審理ノ末  
 免許又ハ無罪ノ言渡(免許無罪ノ言渡)ヲ受クルト屢之レ  
 アルヘシ此ノ如キ時ハ最早甲者ニ對シテ損害ノ賠償物品  
 ノ返還ヲ要ムルヲ得サルカ如何蓋シ私訴トハ犯罪ヨリ生  
 シタル訴訟ナレハ公訴ト其成立ヲ共コスルモノナリ故ニ  
 公訴消滅スレハ隨テ私訴モ消滅スルハ勿論ナリ果シテ然

ラハ此ノ甲者ニ對シテハ賠償返還ヲ要ムルヲ得サルカ如  
 シト雖モ決シテ然ルコト非ラス如何ニモ甲者ハ放免セラレ  
 タレハ之レニ對スル公訴モ私訴モ共ニ消滅セシコトハ相違  
 ナキモ通常民事ノ規則上賠償返還ノ義務アル時ハ甲者之  
 ヲ免ル、ヲ得ス故ニ被告者ハ民法ニ從ヒ賠償返還ヲ要ム  
 ルヲ得ルハ勿論ニシテ只其訴ヲ私訴ト稱セサルノミナリ  
 今一例ヲ擧テ之ヲ明カニセン爰ニ市助ナル者アリ仁助ナ  
 ル者ハ竊盜ヲ爲シタリトテ告訴シ併セテ贓物ノ返還ヲ請  
 求シタリ然ルニ取調ノ末仁助ハ市助ノ所有物ヲ取り去リ  
 シニハ相違ナキモ全ク自己ノ物ト思ヒテ取り去リシモノ  
 ニテ之ヲ盜ムノ意ニ出テタルコト非サルト判然シタルヲ以  
 テ無罪ノ言渡ヲ受ケ竊盜ノ刑罰ハ免カレタルモ固ヨリ市

助ノ所有權ヲ犯シタル責ハ存在セリ故ニ市助ハ依然トシテ其物件ヲ取戻ストヲ得又被告人ハ人ノ家屋ヲ破壊シタル罪ヲ免ル、凡民事上ニテハ其損害ヲ賠償スル義務ヲ有スルコトアリ

然テハ罰ヲ被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタルキハ被害者ハ如何ナル裁判所ニ要償若クハ返還ノ訴ヲ爲ス可キ者ナルカ被害者私訴ヲ爲サ、リシ以前ニ被告人放免セラレタル時ハ民事裁判所ニ訴フルヨリ他ニ途ナシ然ルニ既ニ刑事裁判所又ハ民事裁判所ニ私訴ヲ起シ在ル場合ニハ各其裁判所ニ於テ裁判スルナリ即チ刑事裁判所ハ公訴ノ裁判ト共ニ要償又ハ返還ノ裁判ヲ爲シ民事裁判所ハ通常民事ノ詞訟トシテ相當ノ裁判ヲ爲スナリ

第五節 私訴ノ程式

私訴ヲ刑事裁判所ニ爲ス時ハ別ニ其程式ナキヲ以テ通常ノ文書又ハ言語ヲ以テ之ヲ爲ストヲ得ルナリ

然レ凡民事裁判所ニ爲ス者ハ民事訴訟ノ程式ニ從ハサレ可カラス故ニ訴狀ニハ金高ニ應ジテ印紙ヲ貼用シ又ハ金高ノ百圓以上ナルト以下ナルトニ從テ裁判所ヲ異ニスル等ハ勿論ナリトス

第六節 民事原告人ノ起訴

本節ハ私訴ヲ刑事裁判所ニ爲ス場合ヲ説明スル者ナリ

重罪輕罪ニ因リ害ヲ被リタル者公訴ニ附帶シテ刑事裁判所ニ私訴ヲ爲サントスル時ハ先ツ左ノ三様ニ之ヲ申立ツルヲ得ルナリ

(甲) 司法警察官又ハ檢事ニ爲シタル告訴ト共ニ之ヲ申立ツルヲ

(乙) 公訴ノ起リタル後其旨ヲ豫審判事ニ申立又ハ公訴ノ本案ニ付始審終審ノ裁判言渡アル前ニ之ヲ刑事裁判所ニ申立ツルヲ

(丙) 豫審判事ニ告訴ヲ爲シ併セテ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ爲ス事

(甲)ノ場合ニハ告訴狀ノ末ニ横奪セラレタル物品ノ返還ヲ受ケ度キ事若クハ損害ノ賠償ヲ要メ度キ事ヲ明瞭ニ陳述シ置クヘシ(乙)ノ場合ニハ豫審判事ニ宛テ又ハ刑事裁判所(即チ何々控訴院ノ長ニ若)ニ宛テタル書面ニ物品ノ返還損害ノ賠償ヲ要メ度キ趣ヲ記載シテ差出ス可シ但其要求ヲ爲

スハ書面ノミニ限ラス口述ヲ以テモ爲スヲ得ヘシ例ヘハ被害者豫審判事ノ面前又ハ公判廷ニ証人トノ呼出サレタル場合ノ如キハ其席ニ於テ之ヲ申立ルヲ得ルノ類ナリ(丙)ノ場合ハ被害者ノ爲メニハ實ニ利益アル簡條ニシテ且尤モ緊要ナリ前章々ニ民事原告人云々ノ点ニ論シ至レハ後章ニ於テ説明スヘシト送リテ付ケ置キタルハ此場合ヲ指スモノトス(甲)ノ場合ニ於ケル私訴ノ申立ハ唯告訴ニ附加シテ請願シタルモノナレハ固ヨリ公訴ヲ起スノ力ナク又(乙)ノ場合ニ於ケル私訴ノ申立ハ既ニ公訴ノ起リタル後ナレハ是亦單ニ請願ニ止マルト雖(丙)ノ場合ニ於ケル民事原告人ト爲ルノ申立ヲ爲シタル時ハ檢事ノ起訴ヲシト雖モ當然公訴ヲ提起スルノ効アル者ニシテ實ニ治罪法第

一條ノ原則ノ例外ニ屬スルナリ故ニ其申立ヲ受理シタル時ハ豫審判事ハ檢事ノ意見如何ナルニ拘ハラズ引續キ豫審ヲ行フノ權能ヲ有ス

然リト雖モ豫審判事ニ對シテ民事原告人ト爲ル可キノ申立ヲ爲シサヘスレハ直ニ公訴ヲ提起スルノ効アリト思惟ス可カラズ其事件固ヨリ罪トナラス又ハ申立ル如キ損害ナシト認ムル時ハ豫審判事ハ之ヲ受理セサルナリ故ニ豫審判事之ヲ受理シテ初メテ公訴ハ提起セラレタル者トス豫審判事之ヲ受理シタル時ハ其證書ヲ受取り置クヘシ

民事原告人ト爲ルヘキノ申立ヲ爲ス書面ニハ告訴狀ノ如ク犯罪ノ性質、方法、日時、場所、被告人、證人ノ住所、氏名、其他証憑及ヒ事實參考ト爲ル可キヲ記載シ而シテ私訴ノ要點

ヲ明瞭ニ記載ス可シ

甲乙丙何レノ場合ヲ論セス私訴ノ目的ヲ明カニ申立ツ可キハ勿論ナリ否サレハ物件ノ返還ヲ求ムルニ在ルカ損害ノ賠償ヲ要ムルニ在ルカヲ知ルヲ能ハサルナリ然レモ亦己レノ受ケタル損害ノ金額ヲ定メテ記載スルヲ以テ必要ノ事トセス何トナレハ法律ハ賠償金ノ價額ヲ算定スルハ總テ裁判官ノ聰明ト良心トニ放任シタルヲ以テ裁判官ハ訴訟人ノ名望身分及過失ノ輕重損害ノ多寡等ニ據テ之ヲ判定スルカ故ニ民事原告人ハ則チ其判定ニ委スルヲ得可クレハナリ加之民事原告人ハ其事件ヲ公判ニ附セラレタル時ハ必ス其席ニ出頭シテ被害ノ事實及ヒ私訴ノ目的ヲモ陳述スヘキ者ナレハ勢ヒ證據ニ據テ金額ヲ定メ之ヲ要

求セザルヲ得ス(損害ノ高チ定ムルニハ本章第一節ニ掲ケ  
 ニテ陳述ヲ爲ス順序手續)  
 ハ本章第九節ニ詳ナリ  
 前ニモ論セシ如ク私訴ノ責チ負擔スヘキ人ハ啻ニ公訴ノ  
 被告人ノミナラス或ハ物品ヲ買取シテ占有スル人アリ或  
 ハ典物トシテ受取リタル人アリ或ハ民事擔當人ト稱スル  
 者アリ共ニ私訴ノ責チ負擔セサルヲ得ス然ルト雖モ私訴  
 ヲ起スノ初メニ當リテ何人カ物品ヲ占有スルカ又何某カ  
 民事擔當人タルカヲ知リ得サルコトアルヘシ故ニ此場合ニ  
 ハ私訴ノ申立ヲ爲シ若クハ民事原告人ト爲ル可キノ申立  
 ヲ爲スニ當リ強テ其責ニ任スル人ヲ指名スルヲ要セス但  
 タ物品他人ノ手ニ在ラハ其人ヨリ返還ヲ受ク可シ被告人  
 無資力ナレハ民事擔當人ヨリ損害ヲ要求ス可シト記載ス

ルヲ以テ足レリ斯ク爲シ置カハ公判ノ節判事ハ返還又ハ  
 賠償ノ責ニ任スル人ヲ公判廷ニ呼出スノ例規ナリ  
 告訴狀ニ不明ノ點アリ又ハ説明ヲ要スル時判事ハ民事原  
 告人タルノ申立ヲ爲シ居ラサル告訴人ヲ證人トシテ呼出  
 ス可キノハ既ニ前章ニ於テ説キタリシガ之ニ反シテ若シ  
 民事原告人タルノ申立ヲ爲シタル告訴人ハ豫審判事ノ面  
 前ニハ事實參考人トシテ呼出サレ公判廷ニハ即チ私訴ノ  
 原告人トシテ列席スル者ナリ  
 被害者一旦私訴ノ申立ヲ爲シタリト雖モ之ヲ願下ケ復タ  
 更ニ其申立ヲ爲シ若クハ其要ムル所ヲ變更スルコト得ル  
 ナリ加之其再ヒ私訴ヲ爲シ若クハ其要ムル處ヲ變更スル  
 ハ公訴ノ本案ニ付始審終審ノ裁判アルマテハ何時ニテモ

差支ナシ要スル所ヲ變更スルトハ贓物ノ返還ヲ要メタル  
ヲ止メテ損害ノ賠償ニ變シ若クハ賠償ノ額ヲ増シ或ハ減  
スルヲ得云フ

治罪法第二十一条ニ曰ク「訴訟關係人ハ裁判所所在ノ地ニ  
住セザルモ其地ニ假住所ヲ定メ書記局ニ届ケ置ク可シ  
否ヲサレル時ハ書類ノ送達ナシト雖モ異議ヲ申立ルヲ得  
ス」トアリ蓋民事原告人ハ豫審終結ノ言渡其他故障ニ關ス  
ル書類ノ送達ヲ受クル權利アリト雖モ若シ裁判所ヨリ遠  
隔ノ地ニ住スル時ハ右ノ規則アルヲ以テ書類ノ送達ナキ  
モ不服ヲ訴フルヲ得ス何トナレハ送達ヲ受クル權利ヲ抛  
棄シタリト見做セハナリ故ニ必ス裁判所々在ノ地ニ假住  
所ヲ定メ書記局ニ届ケサルヘカラス裁判所所在ノ地トハ

其裁判所近傍ノ地ヲ謂フ者ニシテ之ヲ例セハ東京府下ナ  
レハ朱引内ノ地ト謂フカ如キノ類ナリ

第七節 私訴ノ願下、棄權、私和

私訴ハ願下又ハ棄權シ若クハ私和スルヲ得ルモノトス  
願下トハ一度訴ヲ起シタル後證左ノ不充分ナルカ又ハ其  
他ノ事故ニ因リ之ヲ願下クルヲ云フ而シテ願下ヲ爲シ  
タル後ニ至リテ充分ナル證左ヲ見出シ若クハ事故ノ己ミ  
タル時ハ更ニ訴フルヲ得ル次第ハ前節ニ論シタルカ如  
シ  
棄權トハ願下ノ如ク一時訴訟ヲ引取ルニ非スシテ返還賠  
償ヲ要求スル訴權ヲ根本ヨリ拋棄スルヲ云フ故ニ私訴  
ノ棄權ヲ爲セザル以上ハ復ヒ私訴ヲ起スヲ得ス



私和トハ返還、賠償ノ義務アルモノト示談和解スルヲ云  
 フモノニシテ契約上私訴ノ權ヲ讓ルナリ故ニ亦再ヒ私訴  
 ナ起スヲ得サル者トス  
 願下棄權ヲ爲サント欲スル者ハ固ヨリ其旨ヲ裁判所ニ申  
 立ツ可キ者トス然レモ其書面ニハ其理由ヲ詳カニ記載ス  
 ルヲ要セス趣旨明カナレハ則チ足レリトス口述ヲ以テス  
 ル時ト雖モ亦同シ私和ハ其義務者ト契約上成立シモノナ  
 レハ和解整ヒタル上ニテ其旨ヲ書面又ハ口述ヲ以テ裁判  
 所ニ申立ツ可シ  
 願下、棄權、私和ノ解釋及ヒ之ヲ爲ス手續ハ略ホ前條ノ如シ  
 然ルニ願下ニ關シテハ別ニ緊要ナル規則アルヲ以テ左ニ  
 之ヲ説カン

被害者ハ私訴ヲ起スニ付刑事裁判所民事裁判所中ニテ其  
 一ヲ擇ムノ權利ヲ有スルコトハ前第四節ニ於テ詳説スルカ  
 如シ然ルニ二箇ノ裁判所ニ同時ニ訴フルコト能ハサルハ勿  
 論既ニ一旦一裁判所ヲ撰ミタルキハ復タ容易ニ他ノ裁判  
 所ニ轉スルコトヲ許サ、ルヲ以テ原則トス是レ一途ヲ擇ミ  
 シ時ハ後々他ノ途ニ就クコト能ハスト云フ格言ヲ適用シタ  
 ルナリ  
 然ラハ如何ナル場合ニ於テ一旦擇ミシ裁判所ニ在ル私訴  
 ナ願下ケ之ヲ他ノ裁判所ニ訴フルコトヲ得ル乎民事裁判所  
 ニ私訴ヲ爲シタル時ト刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ニ  
 依リ區別アリ  
 民事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ檢事カ其事件ニ付刑事

裁判所ニ公訴ヲ起シタル時ニ非サレハ被害者民事裁判所  
ニ爲シタル私訴ヲ願下ケ更ニ刑事裁判所ニ私訴ヲ爲ス  
ヲ得ス

刑事裁判所ニ私訴ヲ爲シタル時ハ被告人ノ承諾ヲ得ルニ  
非サレハ之ヲ願下ケ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ爲スヲ得  
ス今被害者被告人ノ承諾ヲ得スシテ刑事裁判所ニ爲シタ  
ル私訴ヲ願下ケ更ニ民事裁判所ニ其訴ヲ移シタル場合ニ  
於テ被告人之ニ故障ヲ申立テタルニ由リ其私訴ハ却下セ  
ラレタルヲ以テ害被害者ハ復ヒ刑事裁判ニ其訴ヲ爲ス庄固  
ヨリ法律ノ禁スル所ニ非ラス然ルニ被害者復ヒ刑事裁判  
所ニ其訴ヲ爲ス前ニ被告人ニ對スル公訴ノ裁判アリタル  
時ハ最早訴ヲ爲スヲ得サル可シ何トナレハ民事裁判所

ニ規則ニ反スル訴ヲ起シタルト此反則ヲ補フニ延引シタ  
ルトノ二事ヲ以テ訴權ヲ拋棄シタル者ト見做スニ足ルノ  
理由アレハナリ

以上反則ヨリ生シタル費用ハ總テ被害者ニ於テ之ヲ負擔  
ス可キ者ニシテ被告人ヲシテ其責ニ任セシムルヲ得ス

第八節 私訴權ノ消滅

私訴ハ其原因犯罪ニ在ルヲ以テ犯罪ヲ證明シ刑ヲ適用ス  
ルヲ目的トスル公訴消滅(公訴ノ消滅スル場合ハ治)スレ  
ハ隨テ私訴モ其性質ヲ變シテ純然タル民事ノ訴訟ト爲ル  
ナリ然ルニ左ニ記スル場合ニ於テハ當ニ私訴ト謂フ名稱  
ヲ變スルニ止マラス全ク賠償返還ヲ要ムルノ權利ヲ消滅  
スル者トス

一 被害者ノ棄權又ハ私和  
 二 確定裁判  
 三期満免除  
 棄權私和ノ解ハ前節ニ掲ケタルヲ以テ今之ヲ論セス但々私訴權ヲ拋棄シ又ハ私和シタル時ハ最早復ヒ物品ノ返還損害ノ賠償ヲ要ムルヲ得サルコト記憶ス可シ  
 確定裁判トハ一事件ヲ再ヒ裁判ス可カラスト謂フ原則ヲ適用シタル規則ニシテ其主眼トスル處ハ一旦裁判アリテ其言渡確定動カス可カラサルニ至リシ以上ハ後日其裁判ニ如何ナル間違アルコトヲ看出スル復タ更ニ同一ノ事件ニ付訴ヲ起スコトヲ許サ、ルニ在リ一度言渡サレタル裁判ノ確定スルニハ二箇ノ方法アリ其一ハ上訴(即チ控訴上

告等ヲ云)ヲ經盡シタルニ由ルモノト其二ハ期限ヲ經過シテ上訴ノ權ヲ失ヒシニ由ルモノトナリ夫レ斯ノ如クシテ私訴ニ付一旦言渡サレタル裁判確定シタル時ハ後ニ其事件ニ付復ヒ私訴ヲ起スコトヲ得サルモノトス一例ヲ舉クレハ甲者アリ乙者ニ對シテ贓物ノ返還ヲ訴ヘタレト遂ニ敗訴シ其裁判確定シタル後復タ新ニ其物品ノ代價ヲ請求スルカ如キ又前ニ五百圓ノ損害賠償ヲ要メ敗訴シタル後ニ百圓ノ要償ヲ訴フルカ如キ一見スレハ彼是目的ヲ異ニスルカ如クシト雖モ精シク察スレハ全ク前後同一ノ事件ヲ原告トシテ起シタル者ナレハ乃チ前ノ確定裁判ニ因テ私訴ヲ爲スノ權利ハ消滅シタルヲ以テ彼ノ訴ハ相立タサルナリ

確定裁判ノ規則ハ隨分議論ヲ要スルト雖モ此小冊子ニ於テ能ク詳説スルヲ得サルヲ以テ右ハ其概梗ヲ掲ケタルノミナリ

期滿免除ニ依リ私訴ヲ爲ス權利消滅スルトハ法律ニ定メタル期限ヲ經過シテ私訴ヲ爲スハ一切之ヲ採用セス被告ヲシテ其責ニ免レシムルヲ云フ

期滿免除ハ民事訴訟ニモ刑事訴訟ニモアリ刑事期滿免除ノコトハ治罪法ニ之ヲ定メ名ケテ公訴期滿免除ト云フ民事期滿免除ノコトハ之ヲ民法ニ定ムルモノニシテ毫モ刑事ト相關セス然ルニ私訴ハ其性質民事ニ屬スルト雖モ期滿免除ノコトハ總テ公訴ノ期滿免除ノ規則ニ從ヒ民事ノ期滿免除ニ依ラザルモノトス其故如何トナレハ私訴ノ原由ハ公

訴ト同シク犯罪ヨリ生スル者ナルヲ以テ彼是ノ區別ヲ爲スコトヲ得サレハナリ

治罪法第十二條ニ曰ク私訴期滿免除ノ期限ハ被害者無能力ナル時又ハ民事裁判所ニ其訴ヲ爲シタル時ト雖モ公訴期滿免除ノ期限ト同一ナリトスト而シテ公訴期滿免除ノ期限ハ左ノ如シ

- 一 違警罪ハ六月
- 二 輕罪ハ三年
- 三 重罪ハ十年

此ノ期限ハ犯人未ダ刑ノ言渡ヲ受ケサル前ニ爲シタル私訴ニ適用スル者ナルカ故ニ若シ公訴ニ付キ既ニ刑ノ言渡アリシ後ハ民法ニ定メタル期滿免除ノ例ニ從フモノナリ

但刑ノ言渡アリシ後ニ起ス物品返還損害要償ノ訴ハ民事  
裁判所ニ之ヲ爲スハ勿論ナリ

尙ホ期滿免除ノ期限ノ起算方其期限ノ中斷法ニ關スル規  
則アレハ今之ヲ畧ス宜シク治罪法第十三條以下ヲ參觀ス  
ヘシ

第九節 私訴裁判ニ至ルノ手續

私訴ヲ別ニ民事裁判所ニ爲シタルモ之ヲ裁判スル手續ハ  
通常民事ノ詞訟ニ於ケル手續ト異ナルヲナシ之ニ反シ刑  
事附帶ノ私訴ニ付テハ通例公訴ト共ニ審理スルヲ以テ其  
手續モ亦前者ト差別アリ乃チ左ニ之ヲ解説スヘシ  
何レノ場合ヲ論セス民事原告人ハ呼出狀ヲ以テ公判廷ニ  
呼出サル、者トス呼出狀ヲ受ケタル時ハ其指定ノ日時ニ

出頭セサル可カラズ但シ代人ヲ以テ出頭セシムルモハ委  
任狀ヲ與フヘシ若シ呼出ヲ受ケ出頭セサル時ハ裁判所ハ  
闕席ノ儘私訴ノ裁判ヲ爲ス

民事原告人公判廷ニ於テ發言ヲ爲ス順序ハ檢察官發言ヲ  
爲シタル後ニ在ルヲ以テ原則トス然ルニ輕罪公判ノ場合  
ト重罪公判ノ場合トハ稍ヤ相違アリ先ツ輕罪公判ヨリ説  
カン

輕罪公判ニ於テハ先ツ裁判長ヨリ被告人ニ對シ其氏名年  
齡身分職業住所原籍及モ出生ノ地ヲ問フ其答辨終テ後檢  
事被告事件ヲ陳述シ以テ審理ヲ求ム次ニ民事原告人ハ被  
害ノ事實ヲ證明ス可キ者トス民事原告人ノ被害事件ノ陳  
述了ルヤ裁判長ハ即座ニ被告人ヲ訊問シ証人ヲ取調フ可

シ而シテ事實ノ訊問終レハ更ニ事實ニ付キ辨論ヲ始シム  
 此時ニ於テモ第一ニ檢事ヨリ辨論ヲ初メ第二ニ民事原告  
 人第三ニ被告人第四ニ民事擔當人ト順次ニ辨論シ之ヲ終  
 レハ檢事ハ法律適用ニ付其意見ヲ陳述シ次ニ民事原告人  
 ハ私訴ニ付キ其請求ノ点ヲ陳述ス可キモノトス蓋シ此場  
 合ハ民事原告人カ私訴ニ付キ最終ノ陳述ナルヲ以テ此ヨ  
 リ後ハ最早其要ムル處ヲ變更スル能ハサルヘシ故ニ民事  
 原告人損害ノ額ヲ定メテ之ヲ要メ又ハ其他ノ請求ヲ爲ス  
 モ皆此時ニ在リ(重罪公判ノ時モ亦同シ)  
 重罪公判ニ於テハ訴訟關係人各其席ニ就キタル後裁判長  
 ハ書記ヲシテ公訴狀ヲ朗讀セシメタル上被告人ヲ訊問シ  
 次ニ証憑ニ就キ被告人ヲシテ辨解ヲナサシメ又ハ証人ヲ

訊問ス民事原告人ハ更ニ証人ヲ訊問スルヲ又証人ヲシテ  
 他ノ証人ト對質セシムルヲ請求スルヲ得斯クノ如ク  
 シテ事實ノ取調ヘ終リタル後ハ檢事ハ第一ニ發言シ民事  
 原告人ハ第二ニ被害事實ニ付辨論ヲ爲シ以テ被害ノ点ヲ  
 証明スヘシ辨論終結ノ言渡アリタル時ハ檢事法律適用ノ  
 爲メ其意見ヲ陳述ス此ノ辨論終リタル後民事原告人ハ私  
 訴ニ付キ其請求スル所ヲ陳述ス可シ  
 重罪公判輕罪公判共ニ右ノ手續終リタル時裁判言渡ヲ爲  
 ス而シテ私訴ハ其取調未タ充分ナラサル場合ノ外ハ公訴  
 ノ裁判ト同時ニ裁判言渡アルヲ原則トスルナリ然レ私  
 訴裁判費用ハ民事ノ規則ニ從ヒ敗訴シタル者之ヲ擔當セ  
 サル可カラス

裁判言渡書ハ裁判所ヨリ之ヲ下渡サスト雖モ若シ民事原告人之ヲ入用ナリトスル時ハ自己ノ費用ヲ以テ其<sup>リ</sup>騰本又ハ拔書ヲ求ムルヲ得ルナリ

第十節 私訴ニ對スル上訴ノ手續

私訴ニ對スル上訴ヲ別ナテ三トス曰ク故障曰ク控訴曰ク上告是ナリ

第一故障トハ豫審終結ノ言渡ニ對シ其裁判所ノ會議局ニ向テ覆審ヲ求ムルヲ謂フ民事原告人ハ如何ナル場合ニ於テ豫審終決ノ言渡ニ對シ故障スルヲ得ルカ治罪法第二百四十六條第二項ニ規定スル如ク私訴ニ付キ越權ノ處分アル時ニ限ルモノニシテ其他ニ原由ト爲ス可キモノナシ此ノ私訴ニ付キ越權ノ處分ト謂フハ頗ル曖昧ナルヲ以

テ或ル人ハ免訴ノ言渡ヲモ包含スルト論スレモ恐ラシハ誤リナラン免訴ノ言渡ハ民事原告人ニ取ツテハ不利ナルニ相違ナシト雖モ固ト是レ公訴ニ關スル者ナレハ之ヲ以テ直接ニ私訴ニ關スル越權ノ處分トハ見做シ難カルヘシ民事原告人ハ豫審終結言渡書ノ送達ヲ受クルノ權利アリ其送達ヲ受ケタル言渡書ニ依リ私訴ニ付キ越權ノ處分アリト認メシキハ一日内ニ故障ヲ爲スヲ得但其期限ハ言渡書ノ送達アリタルヨリ之ヲ起算スル者トス故障ヲ爲スニハ其申立書ヲ豫審ヲ爲シタル裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ申立書ニハ只言渡書ニ不服ノ廉アルヲ以テ故障ヲ爲ス旨ヲ記載スレハ足レリトス而シテ之ヲ差出セシ上ハ三日内ニ故障趣意書ヲ書記局ニ差出ス可シ趣意

書ニハ私訴ニ付キ越權ノ處分アルヲ明瞭ニ記載スルヲ要ス

會議局カ爲シタル故障ノ判決ニ付尙ホ不服アル時ハ更ニ上告ヲ爲スヲ得ヘシ

第二控訴ハ公判ニ於テ言渡サレタル私訴ノ裁判ニ付不服アル時其言渡ヲ爲シタル裁判所ヨリ上級ノ裁判所ニ覆審

ヲ求ムルヲ目的トスルニ在リ但重罪裁判所ニ於テ爲シタル私訴裁判言渡ニ付テハ控訴スルヲ許サズ止テ上告ヲ爲

スヲ得ルノミトス  
輕罪裁判所ノ私訴裁判言渡ニ對シ控訴ヲ爲サントスル者

ハ其言渡アリタルヨリ五日內ニ其申立書ヲ原裁判所ノ書記局ニ差出ス可シ○控訴ノ判決ニ對シ不服アル時ハ上告

ヲ爲スヲ得

第三上告ハ故障又ハ控訴ト異リ治罪法第四百十條ニ定メタル十一箇ノ原由アルニ非レハ爲スヲ許サズ

上告ノ期限ハ三日ナリトス但豫審ニ付テハ言渡書ノ送達アリタルヨリ起算シ公判ニ付テハ言渡アリタルヨリ起算

ス而シテ上告ヲ爲サントスル者ハ原裁判所ノ書記局ニ初メニ上告申立書ヲ出シ次ニ上告趣意書ヲ差出ス可シ申立

書ハ上告期限内ニ必ス差出サ、ル可ラス否ラサレハ權利ヲ失フヘシ趣意書ハ其申立ヲ爲シタル五日內ニ差出スヲ

要ス

第十一節 私訴裁判ノ執行

私訴裁判ノ言渡確定シタル時ハ之ヲ執行セサル可カラズ



而シテ其執行ハ通常民事ノ規則ニ從ヒ刑事裁判所ニ於テ之ヲ爲ス可キ者トス故ニ言渡確定セシ時ハ民事原告人ハ速ニ其執行ヲ請願スヘシ然レモ贓物ノ還給損害ノ賠償ノ宣告ヲ受ゲタル者還給賠償セサル時ハ民事原告人ヨリ更ニ民事裁判所ニ身代限ノ処分ヲ請求スルヲ得

第六章 誣告罪ノ事

至當ノ原由アリテ告訴告發ヲ爲スハ素ヨリ適法ノ所爲ナルヲ以テ刑罰ヲ蒙ムルコトナシト雖モ若シ自己ノ情慾若シハ怨恨ヲ滿タサンカ爲メニ事實ノ之レ無キ事又ハ或ル罪ノ犯人ニ非サル事或ハ犯罪トナル可キ要件ノ具備セサルコト即チ民事裁判所ニ訴フ可キ事ナルヲ知悉シナカラ書面又ハ口頭上ニテ詐僞ノ告訴告發ヲ爲シタル時ハ其所爲ハ

即チ誣告<sup>〇</sup>ノ犯罪ナルヲ以テ刑罰ヲ受クルノ責アリ故ニ告訴人民事原告人告發人ハ注意シテ猥リニ告訴告發ヲ爲ス可カラス  
人ヲ罪ニ陷<sup>テ</sup>ス爲メ誣告ヲ爲シタル者ハ左ノ例ニ從テ刑罰ニ處セラレヘシ

一 重罪ニ陷ラシムル爲メ誣告シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮ニ處シ十圓以上五十圓以下ノ罰金ヲ附加ス

二 輕罪ニ陷ラシムル爲メ誣告シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮ニ處シ四圓以上四拾圓以下ノ罰金ヲ附加ス

一旦誣告ヲ爲スト雖モ未タ被告人ノ推問ヲ始メサル前ニ

於テ誣告者悔悟シテ自首シタル時ハ前條ニ掲ケタル刑罰  
ヲ免カル、ナリ然ルニ之ニ反シテ誣告ニ因テ被告人刑ニ  
處セラレタル時ハ誣告者ハ刑法第二百二十一條第二百二  
十二條ニ記載セル例ニ照シテ處斷セラレヘシ  
告訴人告發人民事原告人ニ誣告ノ罪アル時ハ勿論之レナ  
キ時ト雖モ被告人ニ對シ損害ノ償ヲ拂フ可キ義務ヲ免カ  
レサルコトアリ其義務ヲ生スル場合ハ治罪法第十六條ニ規  
定セリ

同條第一項ニ曰ク被告人免訴又ハ無罪ノ言渡ヲ受ケタル  
場合ニ於テ其訴訟ノ原由告訴人告發人又ハ民事原告人ノ  
惡意若クハ重キ過失ニ出テタル時ハ是等ノ者ニ對シ損害  
ノ償ヲ要ムルコトヲ得」ト同條第二項ニ曰ク被告人刑ノ言渡

ヲ受ケタリト雖モ告訴人告發人又ハ民事原告人ヨリ惡意  
若クハ重キ過失ニ因リ其犯罪ニ付キ過實ノ申立ヲ爲シタ  
ル時亦同シ」ト同條第三項ニ曰ク民事原告人豫審又ハ公判  
ノ言渡ニ對シ上訴ヲ爲シ敗訴シタル時ハ被告人其上訴ニ  
因リ生シタル損害ノ償ヲ要ムルコトヲ得」ト是レ即チ告訴人  
告發人又ハ民事原告人ヨリ被告人ニ損害ノ償ヲ拂フ義務  
ヲ生スル場合ナリ  
過失ノ輕重ハ裁判官ノ認ムル處ニ委ヌル者ナルガ故ニ豫  
メ標準ヲ定ムルコトヲ得スト雖モ亦全ク標準ナシトハ謂ヒ  
難シ蓋シ過失ノ輕重ハ固ト注意ノ程度ト相須ツテ生スル  
モノナルヲ以テ些少ノ注意ヲ施セハ判明スヘキ事柄ヲ輕  
卒ニ告訴スルカ如キハ即チ重キ過失ナルヘシ又過實ノ申

立トハ失火犯ヲ放火犯ナリト訴ヘ竊盜ヲ強盜ナリト訴フ  
ルノ類ヲ云フ

第七章 證人ノ資格及ヒ證人ノ心得

裁判官事務ニ練達シ法律ニ明カナリト雖モ犯罪及ヒ犯罪  
前後ノ模様並ニ犯人ノ性質品行等ヲ心ニ知得スルニ非サ  
レハ適實ナル裁判ヲ爲スヲ能ハス而シテ是等ノ事實ヲ知  
ルニハ現ニ之ヲ知悉セル者ノ陳述ニ據ラサレハ他ニ其途  
ナカルヘシ左レハ裁判官ハ事實發見ノ爲メニ必要ナリト  
スル時ハ職權ニ因リ又ハ檢事其他訴訟關係人ノ請求ニ從  
ヒ人民ヲ法廷ニ呼出シ其レヲ知悉スル處ヲ陳述セシ  
ム其呼出ニ應シ或ル事實ヲ申立ル者ヲ稱シテ證人ト謂フ  
ナリ

國民ハ權利トシテ證人タルヲ得ル資格ヲ有シ又義務ト  
シテ證人タラサルヲ得スト雖モ人ハ情ニ溺レ利ニ馳セ往  
々不實ノ陳述ヲ爲スヲ免カレサルヲ以テ其證言ヲ以テ審  
ニ確乎タル證據ト爲サ、ル而已ナラズ證人ト爲リ得ル人  
ト否ラサル人トノ能力ヲ定メタリ而シテ人ハ其事件ニ限  
リテ證人タルヲ得サル者ト如何ナル事件ニ付テモ證人  
タルヲ得サル者トアリ  
其事件ニ限テ證人ト爲ルヲ得サル人ハ治罪法第百八十  
一條ニ之ヲ定ム即チ左ノ如シ

一 民事原告人

二 民事原告人及ヒ被告人ノ親屬

三 民事原告人及ヒ被告人ノ後見人又ハ是等ノ者ノ後見

ヲ受シル者（是等ノ者トハ民事原告人、被告人ヲ指ス）

四 民事原告人及ヒ被告人ノ雇人

如何ナル事件ニ付テモ證人ト爲ルヲ得サル人ハ治罪法

第百八十二條ニ之ヲ定ム即チ左ノ如シ

一 十六歳未滿ノ幼者

二 知覺精神ノ不充分ナル者（白痴、瘋癲ノ類ヲ指ス）

三 瘖啞者

四 公權ヲ剝奪セラレ又ハ公權ヲ停止セラレタル者（公權ヲ剝奪セラレタル者トハ重罪ノ刑ニ處セラレシ人ヲ云フ）

公權ヲ停止セラレタル者トハ重罪ノ刑ニ處セラレシ人ヲ云フ

五 重罪事件ニ付キ重罪裁判所ニ移スノ言渡ヲ受ケ又ハ

重禁錮ノ刑ニ該ル可キ輕罪事件ニ付公判ニ付セラレ

タル者

六 現ニ陳述ヲ爲ス可キ事件ニ付曾テ訴ヲ受ケ其証憑充

分ナラサルニ因リ免訴ノ言渡ヲ受ケタル者（此六項ハ）

ミニ限リテ他ノ事件ニ付テハ證人ト爲ルヲ得ル者

ナレハ第百八十一條中ニ掲ケタル以テ至當トス然レ

ニ治罪法第百八十二條中ニ掲ケアルヲ以テ今之

法律ハ以上ニ列記シタル人々ハ證人ト爲ルヲ許サスト

雖モ事實參考ノ爲メニ其陳述ヲ聽クヲ裁判官ニ許シタ

ルヲ以テ裁判官ハ其陳述ヲ聽ク爲メ之ヲ呼出スヲ屢々アリ

證人ト爲ルハ國民ノ權利ナリ故ニ人重罪刑ニ處セラレ

ハ其權利ヲ剝奪セラレ輕罪刑ニ處セラレハ刑期間其權

利ヲ停止セラル、ナリ又違警罪事件ニ付テハ裁判所ヨリ

呼出ヲ受ケスニ其事件ノ審理前ニ名刺ヲ書記ニ差出ス時

ハ裁判所ハ証人トシテ其陳述ヲ聽クナリ又輕罪事件重罪事件ニ付テモ証人ト爲ラント願出ツルハ素ヨリ不法ニハ非ラサルヘシ然レモ其陳述ヲ聽クト否トハ裁判所ノ職權ニアルヲ以テ強テ陳述ヲ聽カシムルヲ得ス又證人ト爲ルハ夫ノ徵兵ニ應スル義務ト同シク國民ノ義務ナルヲ以テ忽カセニ爲ス可カラス裁判官證人ノ陳述ヲ聽クヲ必要トスル時ハ其者ニ對シ氏名住所職業出頭ノ日時場所及ヒ被告事件ヲ記載シタル呼出狀ヲ發ス證人此ノ呼出狀ノ送達ヲ受ケ疾病公務其他正當ノ事故ナクシテ呼出ニ應セサル時ハ罰金ノ言渡ヲ受ケ又ハ拘引狀ヲ以テ拘引セラル、コアル可シ豫審判事ノ呼出ニ應セサル時ハ二圓以上十圓以下ノ罰金

ヲ言渡サル、ノミナラス罰金ノ言渡書ト共ニ再度ノ呼出狀ノ送達ヲ受ケ又ハ直チニ拘引セラレ其上尙ホ是レヨリ生スル費用ハ總テ擔當セシメラル、ナリ○若シ再度ノ呼出ニ應セサル時ハ二倍ノ罰金即チ四圓以上貳十圓以下ノ罰金ヲ言渡サレ且拘引セラル、コアルヘシ而シテ罰金ノ言渡ニ對シテハ總テ故障及ヒ控訴ヲ許サス然ルニ證人初度又ハ再度ノ呼出狀ヲ受ケサルコト其呼出狀ノ規則ニ背キタルコト又ハ豫知シ難キ正當ノ事故アリテ出頭スルコト能ハサリシコトヲ證明シ以テ罰金ノ言渡ノ取消ヲ豫審判事ニ請願スルコトヲ得公判ニ付呼出サレタル證人其呼出ニ應セサル時ハ左ノ區別ニ從ヒ科料罰金ヲ言渡サル可シ

一 違警罪事件ニ付テハ五拾錢以上壹圓九拾五錢以下ノ  
科料

二 輕罪以上ノ事件ニ付テハ貳圓以上十圓以下ノ罰金  
又再度ノ呼出ヲ受テ仍ホ出頭セサル時ハ右ニ定メタル科  
料罰金ノ二倍及ヒ再度ノ呼出ノ費用ヲ言渡サレ且ツ時ト  
シテハ拘引セラレ、コアル可シ  
罰金ノ言渡ヲ受ケタル者ハ其言渡ニ對シ故障及ヒ控訴ヲ  
許サレズト雖モ其言渡ヲ受ケタルヨリ三日内ニ出廷スル  
コト能ハサリシ正當ノ事由ヲ證明シテ以テ裁判所ニ言渡  
ヲ取消テ請願スルコトヲ得  
證人ハ豫審ト公判トヲ論セズ必ス自身出頭セサル可カラ  
ズ代理人ヲ差出スルニ裁判官ハ之ヲ採用セサル可シ尤モ現

ニ陳述ヲ爲スヘキ事件ハ却テ雇人又ハ妻子等ニ於テ熟知  
シ自身之ヲ知ラサル場合ニハ其趣ヲ書面ニ認メ雇人又ハ  
妻子等總テ事實ヲ熟知シ若クハ直接ニ事件ニ關係シタル  
者ヲ出頭セシムルコトヲ得ヘシト雖モ裁判所ニ不敬ヲ爲ス  
ノ嫌ヒアルヲ以テ呼出ヲ受ケタル者ハ成ル可ク自身ニ事  
實ヲ熟知スル者ヲ伴ヒ出頭シ裁判官ニ其趣ヲ申立ルヲ善  
トス

然レモ呼出ヲ受ケタル者病氣ニテ出頭スルコト能ハサル時  
ハ醫師ノ診斷書ヲ添ヘテ之ヲ届ケ出ツヘシ又公務ニテ差  
支アレハ其長官ノ證明書ヲ以テ届出テ其他何事ニ由ラス  
正當ノ事故ニ因リ呼出ニ應スル能ハサル時ハ之ヲ證明セ  
サルヲ得ス斯ク證明シタル場合豫審判事ノ呼出ニ係ル時

ハ豫審判事自ラ其家宅ニ出張シテ訊問ヲ爲スコトアル可シ  
 借證人呼出狀ニ因リ出廷シタル時ハ其呼出狀ヲ名刺ト共  
 ニ受付係ニ差出ス可シ若シ呼出狀ヲ紛失シタル時ハ其ノ  
 人違ナキコトヲ證明ス可シ  
 出頭シタル證人ハ最初ニ其氏名年齢身分職業住所ヲ訊問  
 セラレ次ニ治罪法第百八十一條第百八十二條ニ記載シタ  
 ル者ナリヤ否ヤノ取調ヲ受クルモノトス證人ハ其訊問ニ  
 對シ明瞭ニ答辨ヲ爲ス可シ裁判官出頭シタル者ハ證人ト  
 爲ルノ資格アリト認メシ時ハ之ニ宣誓ヲ命スルナリ  
 宣誓トハ被告人ヲ愛スル心ヲ除キ憎ム心ヲ去リ又之ヲ畏  
 レ懼ル、心ヲ抱カス清淨潔白ナル良心ヲ以テ正實ヲ旨ト  
 シ毫シモ詐偽ノ陳述ヲ爲サル可シト裁判官ニ誓ヒテ立

ルコト云フ其法式ハ裁判官自ラ證人ニ宣誓書ヲ讀聞カセ  
 之ニ署名捺印セシムルモノトス

宣誓書

宣誓書ノ雛形

何某カ何々被告事件ニ付愛憎畏懼  
 ノ心ナク總テ正實ニ陳述ス可キコ  
 ト宣誓フ

年月日 証人 何 某印

證人ノ姓名ハ必ス證人  
 ト記載シアル下ヘ引キ  
 續キテ書ス可シ又姓名  
 ノミヲ記載スルハ足レ  
 リ住所ハ書スルニ及ハ  
 ス  
 ○印形ヲ所持セサル時  
 ハ指印ヲ爲スモ妨ケナ  
 シ指印ハ指ノ腹ニ肉  
 ナシケ之ヲ押ス可ト  
 ス

證人若シ故ナクシテ宣誓ヲ肯セス又ハ宣誓シテ陳述ヲ爲  
 スコト肯セサル時ハ刑法第百八十條ニ從ヒ四圓以上四十  
 圓以下ノ罰金ニ處セラルヘシ且其言渡ニ對シテハ故障及  
 ヒ控訴ヲ許サレス

然レモ或ル身分職業ヲ有スル者其身分職業ニ關シタル事  
件ニ付他人ヨリ委託ヲ受ケタル秘密ノ事柄ハ裁判官ノ訊  
問アリト雖モ之ニ答フルノ義務ナキカ故ニ宣誓ヲ肯セス  
又ハ宣誓シテ陳述ヲ肯セサルモ罰金ヲ言渡サ、ルコトナシ  
其陳述ヲ拒絕スルコトヲ得ル者ハ即チ左ノ如シ

一 醫師

二 藥商

三 穩婆

四 代言人、辨護人

五 代書人

六 公證人

七 神官、僧侶

證人ハ自身ノ知ル所ノ事ノミチ有リノ儘ニ陳述ス可シ決  
シテ意見ヲ加ヘ想像ヲ以テ事ヲ誇大ニ言ヒ立ツル勿レ又  
事ヲ省畧シ或ハ他人ヨリ傳聞セシコトヲ自ラ知リシ如ク述  
フル勿レ夫レ證人ハ裁判官ノ耳目ト爲リ裁判官目視ルコ  
能ハサル所ヲ視セシメ耳聞クコト能ハサル所ヲ聞カシムル  
者ナレハ其陳述ト現ニ生セシ事實トニ相違アリテハ證人  
ノ義務ヲ盡シタリトハ倣シ難シ加之證人ノ後ニハ一ノ  
重大ナル責任ノ有ル在リテ若シ聊ガニテモ詐僞ノ陳述ヲ  
爲ス時ハ忽チ刑罰ノ苦ヲ受クルニ至ルヘシ之ヲ僞證ノ罪  
ト云フ後章ニ詳説ス  
公判ニ於テハ書記證人ノ陳述ヲ筆記スルト雖モ之ヲ讀聞  
カヌコトナシ然ルニ豫審ニ於テハ書記其陳述ヲ錄取シ豫審



判事ハ證人ニ其陳述ノ相違ナキヤ否ヲ知ラシムル爲メ書  
 記ヲシテ其調書ヲ讀聞カセシム證人ハ讀聞カサレタル所  
 自身ノ申立テシ所ト相違ナシトスル時ハ之ニ署名捺印ス  
 可シ又其申立テ變更シ又ハ増減セシトテ請求スルヲ得  
 證人豫審廷ニ出頭シタルト公判廷ニ出頭シタルトテ問ハ  
 ス即時ニ出廷ニ付テノ旅費、日當及ヒ止宿料ヲ請求スルヲ  
 得又日稼ヲ以テ生業トスル者ハ旅費日當ノ外日稼高ニ  
 等シキ償金ヲ要ムルヲ得  
 旅費日當及ヒ止宿料ノ額ハ各裁判所適宜ニ定ムルヲ以テ  
 今一定ノ額ヲ示ストテ得サレモ法律ニ定メタル制限ハ左  
 ノ如シ

日常五十錢以下

旅費一里十錢以下

止宿料一宿二十五錢以下

住居三里以外ノ地ニ在ル者ハ往復旅費ヲ受ケ及ヒ呼出  
 ノ地ニ滞在中日當並ニ止宿料ヲ受クルヲ得其三里未  
 滿ノ地ニ在ル者ハ旅費止宿料ヲ受クルヲ得ス

第八章 鑑定及ヒ鑑定人ノ心得

裁判官自己ノ知識若クハ證人ノ陳述ニ據ルモ犯罪ノ性質  
 方法及ヒ結果ヲ分明ニ知ルヲ能ハサル時ハ醫師、穩婆、化學  
 士、鑑書人、彫刻師、鋸職、其他學術、職業ニ因リ適當ノ知識ヲ有  
 スル者ヲ呼出シ以テ之レガ鑑定ヲ命スルヲアルヘシ其鑑  
 定ヲ命セラレタル者ヲ鑑定人ト謂フ

治罪法第百八十一條第百八十二條ニ記載シタル者ハ(證人  
 章)

ヲ可<sup>シ</sup>觀事實參考ノ爲メ鑑定ヲ命セラレハ、アリト雖モ正當ノ鑑定人ト爲ルコトヲ得ス然ルニ其他ノ人ハ證人ト同シク國民ノ義務トシテ鑑定ヲ爲スヘキモノナルヲ以テ裁判所ヨリ呼出ヲ受ケタル時ハ必ズ出頭セサルヲ得ス鑑定人呼出ニ應セサルキハ拘引セラレ、コトナシト雖モ罰金ノ言渡ヲ受クヘシ其罰金ノ高ハ證人ノ言渡サル可キ高ト相同シ又鑑定人ハ罰金言渡ヲ取消ヲ請願スルコトヲ得其規則手續ハ証人ノ章ニ説ク所ト異ナルコトナシ鑑定人鑑定ヲ爲スニ方リ正實ニ鑑定ス可キノ宣誓ヲ爲ス可シ其宣誓ノ法式ハ證人宣誓ノ式ニ同シ若シ宣誓ヲ拒ミ又ハ宣誓シテ鑑定ヲ爲スコトヲ肯セサル時ハ刑法第七十九條ニ從ヒ四圓以上四十圓以下ノ罰金ヲ言渡サレ且其言

渡ニ對シテハ故障及ヒ控訴ヲ許サレス  
 倍鑑定人鑑定ヲ爲シタル時ハ鑑定書ヲ作りテ之ヲ裁判官ニ差出ス可シ而シテ其鑑定書ニハ左ノ條件ヲ詳カニ記載シ且記名調印及ヒ每葉ニ契印ス可シ  
 一 鑑定ヲ爲スニ付施シタル手續  
 二 鑑定ニ因リ得タル結果但其結果ヲ得サル時ハ其推測スル所ヲ記載ス可シ  
 三 鑑定ヲ爲シタル時間  
 四年月日  
 若シ二人以上ノ人ト共ニ鑑定ヲ爲シ各自其意見ヲ異ニセシ時ハ各自ニ鑑定書ヲ作ルモ又ハ各自ノ意見ヲ一箇ノ鑑定書ニ記載スルモ妨ケナシ

鑑定人ハ出廷ニ付テノ日常旅費止宿料等ヲ裁判所ニ要ムルコトヲ得ルハ證人ト相同シ但證人ノ日常等ハ之ヲ請求セザレハ受取ルヲ得サレハ鑑定人ノ日常等ハ請求ノ有無ニ拘ハラズ給與セラル可シ加之鑑定ニ付別段ノ費用アリシ時ハ日當等ノ外ニ之ヲ請求スルヲ得ルモクナリ

第九章 偽證罪及ヒ偽鑑定罪ノ事

刑事裁判所ニ證人トシテ呼出サレタル者宣誓ヲ爲シタル上豫審廷又ハ公判廷ニ於テ被告人ヲ曲庇若シハ陷害スル爲メ誤リアル事柄ヲ確實ナリト陳述シ又ハ事實ヲ押シ藏クシ其他總テ詐偽ノ仕方ヲ以テ故ラニ偽リノ證言ヲ爲シタル時ハ仮令ヒ被告人ハ相當ノ刑ニ處セラレ又ハ放免サレタルモ偽リノ證言ヲ爲シタル者ハ其偽リノ罪ヲ免ルハ

コトヲ得ス之ヲ偽證ノ罪ト謂フ

被告人ヲ曲庇スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ニ該ツ可キ刑ハ左ノ如シ

- 一 重罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ二月以上二年以下ノ重禁錮四圓以上四十圓以下ノ罰金
- 二 輕罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ一月以上一年以下ノ重禁錮二圓以上二十圓以下ノ罰金
- 三 違警罪ヲ曲庇スル爲メ偽證シタル者ハ違警罪本條ノ

刑

若シ偽證ノ爲メ被告人正當ノ刑ヲ免ガレタル時ハ偽證者ハ前項ノ刑ニ各一等ヲ加ヘテ罰セラルヘシ  
被告人ヲ陷害スル爲メ偽證ヲ爲シタル者ニ該ツ可キ刑ハ

左ノ如シ

- 一 重罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ二年以上五年以下ノ重禁錮十圓以上五十圓以下ノ罰金
  - 二 輕罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ六月以上二年以下ノ重禁錮四圓以上四十圓以下ノ罰金
  - 三 違警罪ニ陥ラシムル爲メ偽證シタル者ハ一月以上三月以下ノ重禁錮二圓以上十圓以下ノ罰金
- 若シ偽證ノ爲メ被告人刑ニ處セラレタル後ニ於テ偽證ノ罪發覺シタル時ハ偽證者ハ被告人カ處セラレタル通りノ刑ニ座シ若シ其刑前顯ノ偽證ノ刑ヨリ輕キ時ハ前顯ノ例ニ照シテ處斷セラルヘシ其他尙ホ詳細ヲ知ラント欲セハ刑法第二百二十一條以下ヲ參觀ス可シ

鑑定人刑事裁判所ニ於テ宣誓ノ上偽リノ陳述ヲ爲シタル時ハ偽證ノ例ニ照シテ刑罰ニ處セラル、者トス

民事裁判所ニ於テ偽證ヲ爲シタル者モ亦刑ニ處セラル、ハ勿論ナリト雖モ本書ニハ之ヲ省ク

右ノ如ク偽證偽鑑定ヲ爲シタル時ハ其罰ヲ受ケサルヲ得スト雖モ若シ其事件ノ裁判言渡ニ至ラサル前ニ其非ヲ悔ヒテ自首シタルニ於テハ本刑ヲ免セラル、ト知ルヘシ

明治二十二年七月十五日印刷  
同年四月廿七日出版

正價金貳拾錢

著者 大分縣士族 後藤 本馬

神田區今川小路二丁目  
十七番地與村方寄留

新潟縣平民

廣川 喜久治

神田區表神保町壹番地

發行所兼  
印刷者

發行所 日本法律社

神田區表神保町壹地



肆 書 捌 賣

東京銀座四丁目

博聞社

全日本橋區通三丁目

丸善書店

全麴町區下六番町四十五番地

博行館

全神田區表神保町

日本書籍會社

全 全 町

中西屋邦太

全神田區裏神保町

明法堂

全日本橋區馬喰町二丁目

石川書店

西京佛光寺通烏丸東へ入

東枝吉兵衛

大坂本町四丁目

岡島眞七

越後高田稻田鍛冶町

室直三郎

全新潟古町通二番町

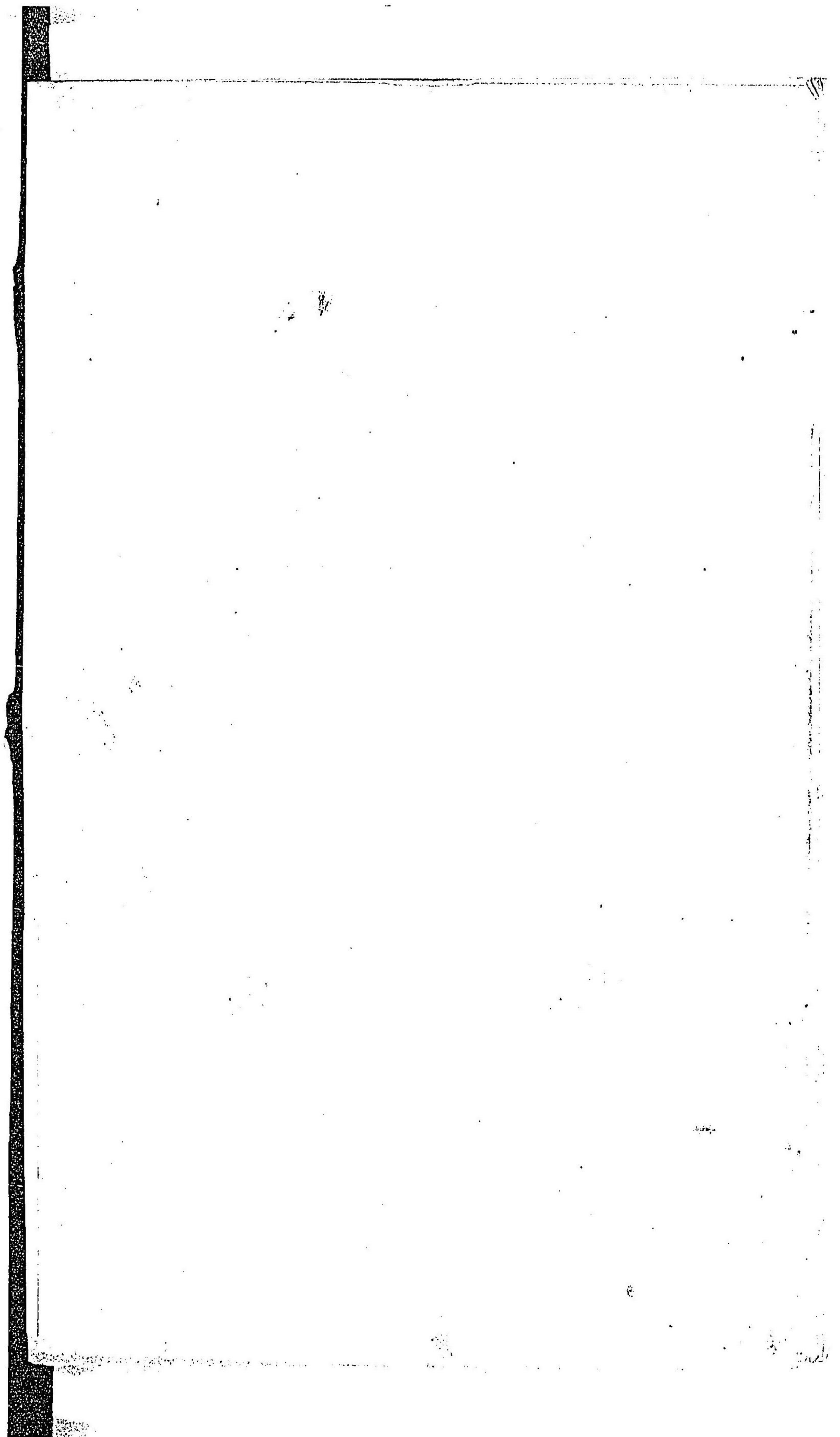
井筒駒吉

勢州津北堀端

若林堂

上州前橋曲輪町

文江堂



特15

690

八審院檢事法學士山田喜之助君題辭  
始審裁判所判事瀧川長教君校閱并序文  
法學生後藤本馬君著

# 裁判之構成全

日本法律社藏版

036435-000-9

特15-690

裁判之構成

後藤 本馬/著

M22

BBR-0088

